

# マレーシア、サラワク州先住民クニャ族の陸稲播種作業における文化的象徴性

## —儀礼的遊戯・播種禁忌・性的象徴性にみられる豊穰祈願と社会紐帯—

古藤 あずさ

北九州市立大学文学部比較文化学科

### 要 旨

マレーシアのサラワク州では、その山地の多さという地形上の理由から先住民族を中心に広く陸稲栽培が行われてきた。アジアを中心に広く栽培されている陸稲には、水稻栽培と同様に作業に伴い多くの儀礼がみられる。筆者が今回調査を行った、サラワク先住民の一種であるクニャ族も陸稲栽培を行う民族である。彼らの陸稲栽培においては、特に播種作業の段階で様々な儀礼的遊戯や禁忌がみられた。クニャ族の言葉で播種作業はヌガンという。ヌガンにおけるそのような儀礼的遊戯・禁忌の多さから、クニャ族の陸稲栽培においてヌガンは特別な意味付けがなされているということがうかがえる。

本論文では、まずこうした禁忌や儀礼が、どのように行われていたか報告する。そして村で行われている陸稲栽培以外の共同作業や、陸稲栽培におけるその他の作業と比較することでその意味を分析した。クニャ族は土地の開墾や火入れ、収穫といった陸稲栽培の他の作業は共同では行わない。播種作業のみが村の生活の中では数少ない、共同で行われる作業のひとつである。共同作業を行う動機として一番考えられるのはその作業効率であろう。しかし、陸稲栽培における他の作業との比較からもわかるように、クニャ族が播種作業のみを共同で行う理由には作業効率以外のものが考えられる。そこで、筆者がヌガンに参与し得られた事例から、彼らはなぜヌガンを共同作業で行うのか、ヌガンにはどのような意味付けがされているのかについて分析する。その結果彼らの播種にみられる儀礼的遊戯といった行為や言説には、豊穰祈願の意味と共に彼らのコミュニティにおける社会的紐帯の役割があることが明らかになった。

### 目 次

#### はじめに

#### 第 1 章 調査地概要

##### 1-1 サラワク州概要

###### 1-1-1 地理

###### 1-1-2 歴史

###### 1-1-3 民族

##### 1-2 ロング・モウ(Long Moh)村概要

###### 1-2-1 地理

###### 1-2-2 歴史

###### 1-2-3 住居

###### 1-2-4 食と嗜好品

###### 1-2-5 風俗

##### 1-2-6 交通

#### 第 2 章 陸稲

##### 2-1 陸稲概要

##### 2-2 ロング・モウ村の陸稲栽培作業

###### 2-2-1 家族単位と作業単位

###### 2-2-2 陸稲の作業工程

##### 2-3 クニャ(Kenyah)族の播種

###### 2-3-1 作業工程

###### 2-3-2 リーダーと順番

###### 2-3-3 スリンピット(Selimpit)

###### 2-3-4 ングノ(Ngano)・シラム(Siram)

#### 第 3 章 村でみられた共同作業

##### 3-1 道路補修作業

##### 3-2 牧師の歓待準備

##### 3-3 狩猟、漁撈

##### 3-4 芝生整備と清掃作業

##### 3-5 建設作業、葬式

##### 3-6 小括

#### 第 4 章 ヌガン Nugan(播種)の事例分析

##### 4-1 実施日程

##### 4-2 儀礼の存在

##### 4-3 禁忌の存在

###### 4-3-1 スリンピット

###### 4-3-2 男女の作業

##### 4-4 もてなし

##### 4-5 遊戯的要素

###### 4-5-1 ングノ、シラム

###### 4-5-2 出合いの要素

##### 4-6 参加機会の平等性

#### 第 5 章 考察

##### 5-1 共同作業と人々の関わり方

##### 5-2 ヌガンの象徴的意味

#### おわりに

#### 謝辞

#### 資料

## はじめに

ボルネオ島に位置するマレーシアのサラワク州には、熱帯雨林が育んだ多様な民族の生活文化が存在する。サラワク州政府による公式発表のサラワク先住民数は 28 といわれているが、言語や氏族などをもとに細かく分類すると 40 以上にもなる[Sarawak Tourism Federation]。しかしこれまで内堀によるイバン族の研究や、Spencer による焼畑の研究などで対象とされてきたのはイバン (Iban) 族やビダユ (Bidayuh) 族といったダヤク諸族であり、同じくサラワク先住民であるオラン・ウル (Orang Ulu) に属するクニャ (Kenyah) 族の現在の生活文化を扱った研究はさほど多くない。オラン・ウルの中ではサラワク先住民の中で唯一の狩猟採集を生業とする遊動民プナン (Penan) 族の研究が比較的多くなされている。

筆者は、サラワク先住民でオラン・ウルのうちクニャ族の陸稲栽培の焼畑農作業についての調査を行った。ここでは、稲作にみられる作業の中でも特に播種の段階において儀礼的な行為や禁忌の存在がみられた。本論文ではそれらの行為や思想が現在のクニャ族にとってどのような意味を持ち、現在もなお続けられているのかについて分析する。

筆者は、マレーシアのサラワク州クチン郊外にあるサラワク大学に 2014 年 9 月から 2015 年 6 月まで留学をしていた。そこでの学修課程を終了した後、本論文に関連する現地調査を行った。大学に在籍していた 10 ヶ月間で日常会話程度のマレー語を習得し、調査は英語とマレー語を併用して行った。また、筆者は大学の講義で扱われたサラワクのダム開発と先住民の移住問題に興味を持ち、この問題に積極的に関与しているサラワク大学社会科学部の A 教授の紹介で、バラム川上流域の村に行く機会を得た。このことが調査地を選んだきっかけである。

なお、論文中使用される言葉のうち、マレー語と英語は正体、クニャ語は斜体で表記する。

## 第 1 章 調査地概要

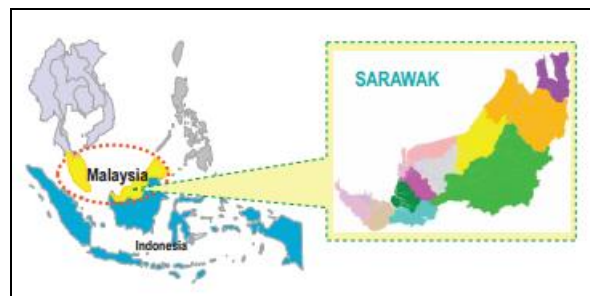
本論は、マレーシアのサラワク州ミリ (Miri) 県バラム (Baram) 地区の先住民クニャ族を調査対象としている。調査地であるロング・モウ (Long Moh) 村はバラム川の上流域にあり、村の人口は 100 人未満である。人々は農耕や漁撈、狩猟などで生計を立てて暮らしている。筆者はこのロング・

モウ村に 2015 年 7 月 19 日から 8 月 22 日までの 35 日間滞在し、村長夫妻の家で生活していた。クニャ族は独自の言語であるクニャ語を話す。筆者はマレー語と英語を用いた聞き取りと参与観察による調査を実施した。高齢者の中には、かつてサラワク州がイギリス統治下にあった時代に学校で英語を習い英語でコミュニケーションができる者も何人かいた。

### 1-1 サラワク州概要

#### 1-1-1 地理

サラワク州はボルネオ島北部に位置するマレーシアの一部である[図 1]。マレーシアは、南シナ海を挟みマレー半島とボルネオ島のサバ州・サラワク州に分かれており、マレー半島を指して西マレーシアや半島マレーシアということもある。

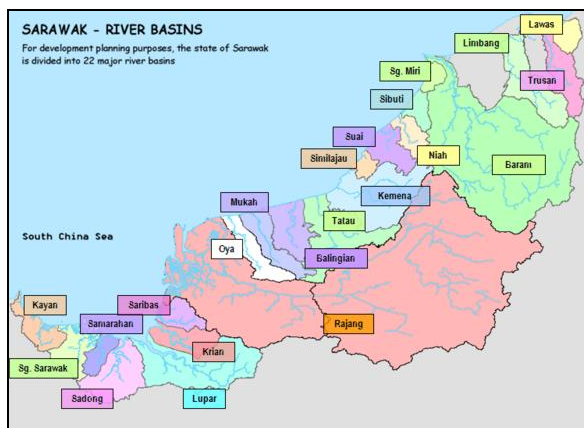


【図 1 マレーシア地図 (Sarawak Facts and Figures, 2010)】

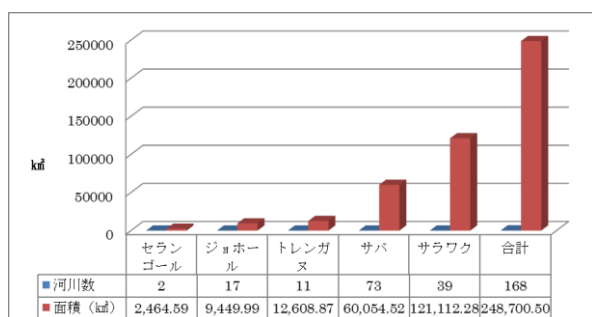
サラワク州は 13 州の中で最大の広さを持ち、その面積は 124,450 平方キロメートル、人口は 271 万人[Department of Statistics, Malaysia Official Portal 2015]である。ボルネオ島の熱帯雨林は世界でも最も多くの生物多様性がみられることで有名である。サラワク州の面積の 80 パーセントは原生林もしくは二次林からなる熱帯雨林である[Official Website of the Sarawak Government 2015]。その熱帯雨林の中には多くの川が流れており、その川は現在にいたるまでサラワクの先住民にとって主要な交通手段であり続けた[図 2]。それは、サラワク州の山地の多さから容易には道路が作れなかったことが要因である。州別の河川数と河川面積をグラフで示す[図 3]。マレーシア内において、川の累計流域面積の半分近くはサラワク州が占めており、州の年間平均降水量はおおよそ 4,500 ミリメートルにもなる[マレーシア灌漑局 HP]。近年、森林伐採と木材の運搬のために道路が整備され始め、人々は車による移動を行うようになった。しかし、現

在でもサラワク州では道路の整備はそれほど進んでおらず、北部に主要な道路があるのみである[図 4]。

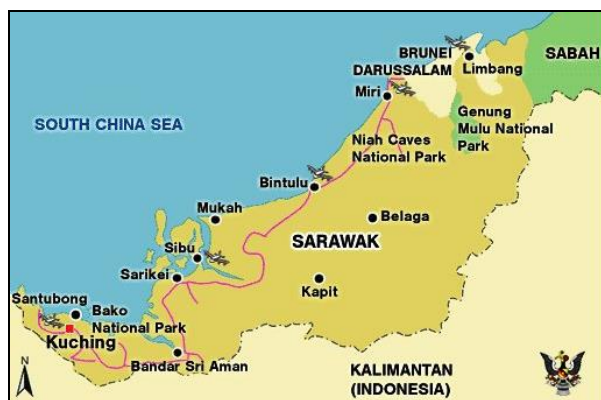
た伝統的なロングボート が主要である。多くのサラワク先住民は、川沿いに村を作ることで移動や生活用水の入手などその地形上の利点を生かし生活をしている。



[図 2 サラワク州の主要河川 (History.To.The.MAX, 2006)]



[図 3 州別河川数と河川面積比較 (マレーシア灌漑局 HP, 2013)]



[図 4 サラワク州地図 (Sarikei Time-Capsule, 2006)]

※ピンク色の線は主要道路を示す。

そのため、大きな河川では定員 50 名前後のフェリー型高速ボート、川の上流域の村間の移動では木をくりぬいて作っ

### 1-1-2 歴史

半島マレーシアとサバ・サラワク州はもともと別の国であったが、1963 年のマレーシア連邦の成立でひとつの国になった。そのため、歴史を始めとして東西マレーシアでは民族構成や公用語 など、多くの点が異なっている。

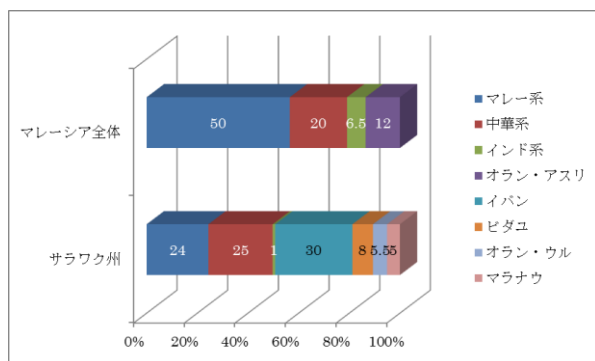
半島マレーシアでは、14 世紀にマラッカ王国が成立しインドと中国を結ぶ交易の中継地点として栄えていた。しかし同時にその利益を狙った国々に次々と侵略、支配される。16 世紀から独立に至るまでポルトガル、オランダ、イギリスの 3 国が半島マレーシアをその支配下においた[中原 1982]。一方、サバ・サラワク州は 16 世紀初め、ブルネイ(正式名称:ブルネイ・ダルサラーム)の支配下にあり、その頃には既にイバン族やマラナウ(Melanau)族といったサラワク先住民が住んでいた。そして 19 世紀になりイギリス人探検家のジェームズ・ブルックが先住民の反乱鎮圧と引き換えにサラワク支配権を手に入れ王となった。彼が最初に手にした土地は現在の第 1 省にあたるクチン(Kuching)周辺だけであったが、彼と後のブルック王達はその領土を少しずつ拡大し、20 世紀初めにはサラワク州最東端のリンバン(Limbang)区ラワス(Lawas)まで支配した。第二次世界大戦中には日本軍がサバ・サラワク州を統治したこともあったが、終戦と共に統治権は連合政府部にうつりイギリスの植民地となった。その後 1963 年にサバ・サラワク州は半島マレーシアとともにマレーシア連邦 を形成した[ザイナル 1983:220-256]。

このように、半島マレーシアと東マレーシアは成り立ちにおいて全く別の歴史背景を持っている。池端・生田によると、サバ・サラワク州が州でありながらマレーシアという国と対抗しうる力を持っていることを示す特権がいくつか存在する[池端・生田 1977]。例えば、他州出身のマレーシア人がサラワク州に入る場合には国外旅行用とは異なるサラワク州限定のパスポートが必要となる。サラワク州は出入国管理権を持っているが、半島マレーシアの州政府に対しては認められていない。またマレーシアの国語はマレー語であるが、サラワク州は英語を公用語としている[池端・生田 1977]。このように東マレーシアが半島マレーシアとの統合後から現在に至るまでその独自性を保っていることがわかる。

### 1-1-3 民族

前述した通り、半島マレーシアとサバ・サラワク州は民族の種類、割合が異なっている[図 5]。半島マレーシアではマレー系、中華系、インド系が多数を占める3大民族であるがサバ・サラワク州ではそれぞれの地域に暮らす先住民が最も多くの割合を占める。サラワク州では人口の30パーセントをイバン族が占め、中華系とマレー系がそれぞれ20パーセントと続く。半島マレーシアにもオラン・アスリといった先住民はいるが、その割合は決して多くはない。

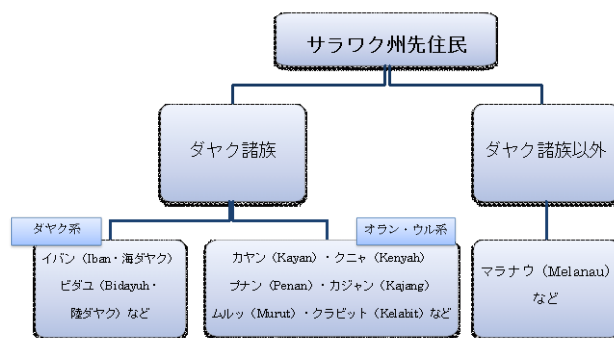
次にサラワク州の先住民の分類について詳しくみていく。サラワク州の民族比率では半島マレーシアに比べてマレー系一人の割合が圧倒的に少なく、最も割合が高いのは先住民の一種であるダヤク族に含まれるイバン族である[図 5]。



【図 5 民族別推定人口割合  
 (マレーシア観光局公式サイト、2014)】

ダヤク族は焼き畑による陸稲栽培や首狩りの習俗、ロングハウス(長大家屋)での居住などの文化を共通して持ち、さらに細かい分類に分けられる[内堀 1896:461]。それが海ダヤクと呼ばれるイバン族や陸ダヤクのビダユ族、そしてオラン・ウルなどである。その分類は研究者により様々なものが提唱されている。内堀は、ダヤク族はボルネオ島に住むプロト・マレー系諸民族の総称であり正しくはダヤク諸族と呼ぶべきだと主張している[内堀 1896:461]。ここではオラン・ウルをダヤク族に含めた上で、海ダヤクと陸ダヤクと区別する[図 6]。サラワク州の先住民にはダヤク族の他に海岸地帯に住むマラナウ族がいる。

筆者の調査対象はこのダヤク諸族に分類されるオラン・ウ



【図 6 サラワク州民族分類図】

ルというグループの中のクニャ族である。ダヤク諸族の中で、主に州南部から東部にかけて居住しており、生活文化や言語において類似する点を持つ人々を総称しオラン・ウルと呼ぶ。オラン・ウルとはマレー語で「川の上流に住む人」を意味し、クニャ族はオラン・ウルでは人口が最も多いとされる。一般にオラン・ウルに含まれるのはバラム川上流域に住むクニャ族の他に、カヤン(Kayan)族、プナン族などであるが、現在は中流域のカジャン(Kajang)族やムルッ(Murut)族もオラン・ウルに含まれる。

オラン・ウルの現在の人口は推定 10 万人でサラワク州の人口のうち 5.5 パーセントを占める [My Malaysia Paradise 2015]。イバン族や内陸に住むオラン・ウルはもともとインドネシア側から移住してきたとされ、現在も彼らはインドネシア領ボルネオに居住していることが知られている[加藤 1982:97]。

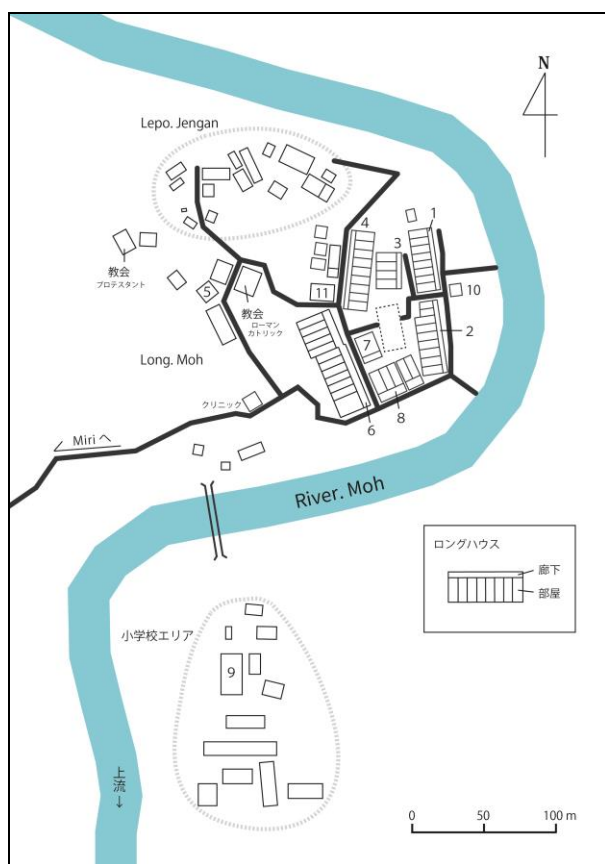
クニャ族は 1920～30 年頃まで首狩りの習慣が盛んであったといわれる[口羽 1982:134]。他のダヤク諸族と同様に焼畑による陸稲栽培を行い、狩猟、川での漁撈、その他農作物の栽培で生計を立てている。また風俗については、カヤン族などにもみられるが、クニャ族は女性の長く伸ばした耳たぶや、男性の耳の上部・耳たぶに見られる動物の角や牙の装飾、耳上で切りそろえ襟足を長く伸ばした髪型などが特徴である。元々は精霊信仰であったクニャ族は、人の死の際に死体を台や杭上に放置する葬法が取られるなど独特の信仰があった [口羽 1982:134]。しかし現在その多くがキリスト教に改宗しつつある。

## 1-2 ロング・モウ(Long.Moh)村概要

ここでは調査地ロング・モウ村について紹介する。村の人間関係や人物については資料に掲載するものとする[資料1、2]。人物にはアルファベットを振り分け、住居には数字を記した。本文中に使用されるそれらの記号は資料1、2の記号と一致している。

### 1-2-1 地理

ロング・モウ村はサラワク州で2番目に大きいバラム川流域の熱帯雨林の中にあり、集落を囲うようにモウ(Moh)川が流れる[図7]。



[図7 ロング・モウ村の地図]

モウ川はバラム川に流れ込む。ロング・モウ村の最寄りの村はロング・スラアン(Long.Slaan)村で、ロング・モウ村から北に2.6キロメートルの地点に位置している。そこまではエンジン付きロングボートを使えば約10～15分で行くことができる。最初に筆者がロング・モウ村を訪れたときは、バラム川上流の村ロング・スミヤン(Long.Smiyaan)村からロングボートに

乗り、川を下ってロング・モウ村に入った。ロングボートに乗っていたのは時間にして45～50分である。

ロング・モウ村は川以外の場所を山に囲まれており、南側の山をひとつ越えればインドネシアである[写真1～3]。



[写真1 ロング・モウ村]



[写真2 道路からみたロング・モウ村]



[写真3 モウ川からみたロング・モウ村]

集落の南端からモウ川を吊り橋で渡ったところに小学校があり、ロング・モウ以外にもロング・スラアンなど数か所の村から子供が通っている。子供たちは通常学校の敷地内で寄宿生活を送り、長期休暇のみ自分たちの村へ帰る。ロング・モウ村の小学生は、低学年であれば親が毎日送り迎えているが、高学年になると集落へ戻らず寄宿生活をする。中等学校はロング・モウ村から直線距離で約 50 キロメートル離れたロング・サン(Long.San)村にあり、就学する 13 歳以上の子供はそこに寄宿している。村には小さなクリニックがひとつあり、平日は医局員と 2 人の看護師が常駐している。彼らはクリニックの横にある住居で生活している。

### 1-2-2 歴史

ロング・モウ村はシラット(Silat)川から移住したルポ・タウ(Lepo.Tau)という氏族により作られたという。そこは元々ロング・スラアン村の土地であったが、ロング・スラアン村の住民はルポ・タウに土地の一部を分け与え、ロング・モウ村が出来上がった[Victor 1978]。また村人の話では、ロング・モウ村の形成時は、ルポ・タウに加えてルポ・エンカウ(Lepo.Engkau)、リナウ(Linau)という氏族もいたという。彼らは、まだクニャ族が首狩りを行っていた頃の戦いでルポ・タウに敗れ、以降ルポ・タウに従い共に村を形成したといわれている。リナウは、サラワク中部を流れるラジャン(Rajang)川の上流に地域名として見ることができ、この地から来た人々の出身地名が氏族名に使用されたものと思われる。また、その 3 氏族に加えルポ・ジェンガン(Lepo.Jengan)という氏族も後からロング・モウに加わった。ルポ・ジェンガンがロング・モウ村に統合されたのは、ルポ・エンカウやリナウと同様の理由であるが、移住したのが最後であったため同じ村内であるものの、3 氏族のロングハウス群から 100 メートル程度離れたところにいくつかのロングハウスを建設した。ロングハウスとは、ダヤク諸族に見られる長屋形態の家屋である。これについては次章で説明する。ロング・モウ村の中心であったルポ・タウは首狩りの英雄を多く輩出したことからバラム川流域では現在でも知名度が高い。そのためロング・モウ村には歴史や民俗芸能を調べるために研究者が何度か滞在している。例えば Chong はロング・モウ村を始めとしたいくつかのクニャ族のコミュニティで伝統音楽について調査を行っている[Chong 1998]。

バラム川上流域の村の名前にみられる Long とは、クニャ語で川の合流点を意味し「ロング」と発音される。したがって

ロング・モウという名前には「モウ川が他の川に合流する位置にある」という意味がある。実際モウ川はバラム川に流れ込んでおり、村は 2 本の川の合流地点にある。この地域にいるカヤン族やプナン族の村名にもしばしばこのロングというクニャ語が使われているが、住民はそれをオラン・ウルの中でクニャ族が人口的に最大規模であるからだと考えている。

現在村にあるロングハウスはもともと村人の出身を示す氏族別に建設されていたという。図 7 に村の地図を示し、ロングハウスに番号を割り当てて以下の説明に用いる。村人の中では、図 7 のロングハウスと住居 1、2、5、11 がルポ・タウで、ロングハウス 3、4 はリナウ、ロングハウス 6、9 はルポ・エンカウによって建てられたと認識されている。しかし現在結婚などにより氏族間の混血が進み、住居 7 はルポ・タウとリナウ、ロングハウス 8 はルポ・タウとルポ・エンカウが混ざっている。

そして 100~200 年ほど前にロング・モウ村は人口の増加に伴い、村人の半数がロング・カバー(Long.Kabar)という村を作って分かれた。ロング・カバー村はバラム川下流に位置し、ロング・モウ村からおよそ 10 キロメートルの距離である。現在もロング・モウとロング・カバーには血縁の近い親戚がおり、狩りの際などに村人が行き来している。

### 1-2-3 住居

調査を行った 2015 年 8 月の村の人口は約 70 人で、ほとんどの村人はロングハウスに居住していた[図 4、5]。



[写真 4 ロングハウス 2]

例外として一戸建ての住居に住む家族もいたが、ロングハウスに住む村人の方が多かった。ロングハウスも一戸建ての住居も高床式であることは共通している。ロングハウスは、



【写真 5 ロングハウス 1(右)ロングハウス 3(左)】

一つの建物に 10 から 20 ほどのドアとそこから奥に伸びる部屋の連なりからなる長屋状の建物である。通常、ロングハウスはドアごとに 1 世帯と数えられ、その 1 世帯が住む部屋を指してビリック(Bilik)と呼ぶ。ビリックに住む 1 世帯が家族としては一番小さな集団で、核家族の場合もあれば 1 世帯の中に数世代がみられることもある。ルアイ(Ruai) と呼ばれる大きな廊下のような共用スペースはロングハウスの特徴のひとつである。また複数の世帯がまとまって住むことは、それ自体がひとつの村落社会ないしは村落における一集落をなすとされている[内堀 1994:483]。結婚などで新たな世帯ができた場合、彼らは新しいビリックをロングハウスの端に継ぎ足していく。そのため、ひとつのロングハウスは血縁関係によって構成されていることがほとんどであった。しかし現在、ロングハウスが建設された当時から時間が経ち、世代交代により血縁関係が浅くなったこと、そして複数いた氏族が入り混じったことなどから、ロング・モウ村においては、同一ロングハウスに居住する住民同士に必ずしも血縁関係がみられるわけではない。また、いくつかの独立した一戸建ての住居にみられるように、人々がロングハウスに住むことを重要視しなくなったということも要因のひとつとして考えられる。かつてロングハウスがひとつの村であった頃と違い、現在はロングハウスがいくつも集まってひとつの村を形成している。そのため、ロングハウスに住まなくても村の一員としてコミュニティに参加することが可能となったことも要因と考えられる。

ルポ・タウ、ルポ・エンカウ、リナウという氏族によって構成されているロング・モウ村には、ロングハウスが 6 つあり、部屋数の合計は現在 89 部屋だという。建て増ししている住居も

あり、それを含めるとおよそ 100 部屋になる。集落に 6 つあるロングハウスは、人が住んでいる部屋よりも空き部屋の方が多くなりつつある。これは近年都市に移住、または出稼ぎに出る住民が増加しているためだ。都市へ完全に移住した住民が放棄した部屋もあれば、住人が村に帰省した際に利用するものもあり、その状態は様々である。集落に住む村人は、空き部屋の所有者が誰であるか認識しているものの、それが放棄されたのか放棄されていないのかまでは把握していない。また、村の多くの人がキリスト教に改宗しており、出稼ぎに出た住民たちの多くはクリスマスの時期に村に戻ってくる。この時期村の人口は 300~400 人ほどにも増加するという。人々は、村に戻った時にかつての部屋を使用する場合もあれば親や親戚の部屋に滞在する場合もある。

村での生活は基本的に自給自足であり現金収入を必要としない、農耕や狩猟を中心とした暮らしである。しかし、以前に比べ街の生活がより身近になり、多くの住民が生活をより便利で豊かにするために、街で働くことを選ぶ。その収入は村で暮らす家族の生活を支えている。村に電気は通っていないが、いくつかの家庭は発電機を所有し夜間に電気を得ている。その他の家庭は灯油ランプを使用し夜間の明かりを得ている。発電機の使用に伴いテレビや冷蔵庫など電化製品を所持する家庭も出始めたが、燃料は容易に手に入らないため、それらの使用は夜間に限られる。また、充電式の懐中電灯も多く用いられている。

村人は、農作業のために畑ごとに簡易的な出作り小屋(Lepau Uma)を作っているが、陸稲用の畑の近くには数日間~数週間の滞在を前提とした住居形式の小屋を作る人々もいる。ソーラーパネルを設置し、電気が確保できるようにしている小屋もある。

村では集落の南側の山の小川から水道をひき、共用の生活用水としている。降水量が少ない日が続くと、水が行き渡らないことも珍しくはない。ロング・モウを囲うように流れるモウ川の水は、以前は飲用であったというが、森林伐採の影響を受け水が茶色く濁っているため、現在は水浴びや洗濯にのみ利用されている。

#### 1-2-4 食と嗜好品

村の住民の主食は米である。焼畑により栽培した陸稲を食べるが、1 年分すべてを賄えない家庭もあり、街から購入することもある。トウモロコシやウパツ(Upat)と呼ばれるタロイモも食べられる。そのほかにはカボチャ、落花生、タピオカや

コマツナ、ティモン(Timon)という大ぶりのキュウリなどが栽培されている。雨期にかけて森ではドリアンやランブータンなどフルーツが採集される。タンパク質は狩猟で手に入る野生の動物の肉の他、川でとれる魚が中心である[写真 6]。仕掛け罠による狩りも行いが、多くの村人は銃を用いて狩りを行い、主にイノシシ、シカ、ヤマネコ、サル、鳥類などを食料とする。雨上がりには女性が積極的にカエルをとりに出かける。



【写真 6 食事の様子】

クニャ族が作る自家製の酒をブラッ(Burak)という。イバン族やビダコ族に代表されるトワ(Tuak)と同様、米やもち米を発酵させて作る酒の一種である。しかしトワより簡易的で、上澄みを取り出さず発酵させた米に水を加え手でつぶし、白く濁ったものを飲むことが多い。中にはざるで米をこしてから飲む者もいる。ブラッはほとんどの家庭で日常的には作っておらず、ヌガンの時期に集中して作られる。原液はアルコール度数が高いが、どの家庭も水で薄め量を多くして飲む。酸味が強いものがよく作られており、村の中で教家族のみ甘いブラッを作っていた。伝統的なブラッの工程では、解糖と発酵のスターターとして米粉で作った団子を用い、茹でた米を原料にアルコール発酵を行い醸造される。その際砂糖などの添加物は一切用いられていない。

そして村人にとってピンロウジとタバコは嗜好品として欠かせないものである。人々はキンマの葉(アイユベ:Aiyupe)

にカルシウムを溶かしたペースト(アポ:Apo)を塗り、ピンロウジ(ピナン:Penan)の果実とタバコの葉を包み込み嚙む[写真 7]。その際出てくる唾液は地面に吐き捨てる。唾液を飲み込むと、強い圧迫感とめまいに襲われる。ピンロウジはマレー語ではシレ(Sileh)だが、クニャ語ではセパ(Sepak)と呼ばれる。



【写真 7 嗜好品。右上から時計回りにキンマの葉、タバコの葉、プラスチックケースに入った石灰のペースト、ピンロウジ】

マレーシアにおいてピンロウジは常にタバコの葉と共に楽しまれ、刺激性、興奮性の麻酔作用があるとされ常習性が高いとも言われる[小林 1986:685]。20 代の若者から高齢者まで誰もがピンロウジの果実または種子とタバコの葉、石灰のペーストが入ったポーチを携帯し、日常的に楽しんでいる。中にはキンマを育てている者にお金を払い、葉を手に入れる者もいる。人によりピンロウジの果実だけを食することを好む者、種子だけを好む者がいる。タバコは、タリッ(Tarit)と呼ばれる葉を乾燥させて作った巻紙で巻き、火をつけて煙を吸う通常の方法でも楽しめる[写真 8]。

#### 1-2-5 風俗

バラム川上流域地区でキリスト教が布教され始めたのは 1950 年代に入ってからだとされるが[岩永 2000:66]、ロング・モウ村においては 1970 年代が始まりである。村に住む 40~50 代の人々によると、彼らが子供の頃はまだ精霊信仰が盛んで、儀式を目にするのもあったという。現在は 9 割以上の家族がキリスト教に改宗し、カソリックが多数派である。現在も精霊信仰であると主張するのは 5 家族のみで、そのうち 1 家族が儀式で使用の際の建物を管理している。し

かし村人の多くがキリスト教に改宗したことで、現在は精霊信仰の儀式などは行われていない。また、オラン・ウルの男性にみられた耳の上下に開けた穴に動物の牙をさす装飾品や、女性が耳たぶを長く伸ばす習俗などは失われつつある。40～60代の女性の中には、子供の頃は耳たぶを長くのばしたものの、その後街へ出た時に目立ちたくないといった理由から切った人も多い。生まれてくる子供に耳たぶの施術はされておらず、50歳以上の女性にみられるのみである。男性の、短く切りそろえ襟足をのばした特徴的な髪型は今でも一般的にみられる。



[写真 8 嗜好品のタバコ]

### 1-2-6 交通

サラワク州の熱帯雨林や川沿いに住む多くの先住民がそうであるように、ロング・モウ村でも主要な交通手段はロングボートであった[写真 9]。ロングボートは大きな丸太をくり抜いたり、板を接いで作る。昔はミリの街まで手漕ぎのロングボートで3日間かかったという。今ではその多くがエンジンを使っており、より遠くへの移動が可能になった。また、2005年には森林伐採のために作られた道路が村に到達し、車を使ってミリの街まで移動することが可能となった。移動にかかる時間はおよそ14～15時間である。しかし、車での移動は高額な交通費(ガソリン代と運転手への賃金)が必要となるため村人が車で街に出かけることはほとんどない。集落の村人が所有する車は2台である。出稼ぎに出た親族や他の村から人が訪れた際に村の車の数は増えるが、彼らが村人の運搬を行うことはまれで、お金を渡し依頼した場合に乘せてもらえることがある。車を所有する者が街に行くのは数ヶ

月に一度の頻度で、その際に多くの人が生活用品の買い付けをまとめて依頼する。それは村人の食料のうち、米やビスケット類、粉末飲料、調味料、菓子類などが街で購入されているからである。街にはタクシーのように、お金をとって人を運搬する車もあるが、電話の通じないロング・モウ村からはこうした車の手配は簡単には行うことができない。



[写真 9 ロングボートでの移動の様子]

## 第2章 陸稲

ここからは実際にロング・モウ村で彼らが行う陸稲栽培をみていきたい。筆者が参与観察を行ったのは陸稲栽培の中でも播種の過程である。クニャ族の播種の工程には、いくつかの決まり事がみられる。

### 2-1 陸稲概要

陸稲とは、畑で栽培される稲のことであり、アフリカや東南アジアの山岳地帯などで多く栽培される。サラワク州は全土地面積の約80パーセントが中程度の勾配もしくは急な丘陵地や山間部からなり、また一般に土壌は不毛で養分に乏しいといわれる[Hatch 1980]。そのため先住民の多くが焼畑による陸稲栽培を行ってきた。焼畑とは、森林や荒無地を焼き、その灰と土地が元来保有している養分を耕作に利用する農法である。農民はひとつの耕作地を2～3年使用したのち一定期間放置し、森林が再生して養分が回復するのを待ち、新しい土地を開墾して焼畑を継続してゆく[大木2006]。サラワクの焼畑と森林伐採について研究をしたホンによれば、熱帯の植物は休閑期に非常に速く成長し、土壌

の再生を可能にすることから、焼畑がサラワク州に適した農法だという[ホン 1989]。しかし、サラワク州で焼畑農業、陸稲栽培を選択するのは貧弱な土地であるからという理由だけではない。サラワク州のように土地余剰が豊富にある条件のもとでは、投下労働当たりの生産性が高い粗放農業を選択することは農民にとって合理的であるからだ [大木 2006:27]。ダブの調査によれば、ボルネオ島の焼畑は、単位面積あたりの生産性ではジャワの水田より低かったが、単位労働(時間)当たりの生産性でみると水田より高かった[Dove 1985]。これは、焼畑がつねに水田より不利な生産性の低い稲作形態であるとはいえないことを示している。生産要素のうち土地よりも労働の方が希少資源であり、条件のもとでは、単位労働時間当たりの生産性が高い稲作形態を選択することは非常に合理的である[Dove 1985]。そのような環境下で、サラワクの焼畑農業は14年から15年周期で開墾場所を移動しながら行われてきたといわれている [岩永 2000:124]。サラワク先住民たちは、その土地を使い尽くした時に、村落ごと新たな場所に移動し、また焼畑を行うのである。

陸稲に限らず水稲の稲作作業には、国や文化を問わず田植えや収穫の時に多くの儀礼がみられる。日本人を含め、稲を作る民族は稲の神、田の神を想定し、神への信仰を守ってきたとされる[関本 1986:44]。また、その神々へのもてなしとして儀礼や祈り、供物が存在する[関本 1986:45]。例えば日本の水稲耕作儀礼では初穂の儀礼や種籾の再生儀礼、そして新嘗祭などがあるが、日本以外の国でもタイ西北部の少数民族には初穂の儀礼に類似した儀礼が存在する[荻原・渡辺 1986:14]。また、インドネシア・バリ島では稲の神が女性、稲田の神が男性とされる聖婚観念の儀礼がある[寒川 1986]。これは、日本で稲作儀礼の一種として行われる綱引きに性的豊穰儀礼の意味合いが込められているように、普遍的に稲作には人間の生殖活動と深い関係があることを示している。このように、稲作作業には数多くの信仰や祭祀があり、陸稲を行う民族には共通の意識から生まれる儀礼があると考えられる。次段では、クニャ族の陸稲の流れを説明し、クニャ族における陸稲の儀礼的特徴を分析する。

## 2-2 ロング・モウ村の陸稲栽培作業

### 2-2-1 家族単位と作業単位

すでに述べたとおり通常ロングハウスのビリック(Bilik)と

呼ばれるひと部屋が1世帯とされ、ロング・モウ村の陸稲作業においては、その世帯が作業を行う上でのひとつのまとまりとされる。ロング・モウ村の世帯別の成員を[資料 1]に、家系図の一部を[資料 2]に示す。夫婦は同一アルファベットで表記し、男性を大文字、女性を小文字とする。陸稲に関係する開墾、収穫作業などは部屋ごとの世帯で行われる。基本的に親とその子供からなる核家族で1世帯が形成されるが、例外的に一戸建ての住居に4世代にわたる家族が住んでいることもある。彼らはその住居に住む全員で1世帯となり、一戸建ての住居に複数の世代が同居しているのは住居5や9である。最年長男性が世帯主と判断されるためか、住居5に住むSの畑は人々から「Sの畑」ではなく世帯主を指して「Pの畑」と呼ばれることがあった。この時にSの畑を「Pの畑」と呼んだ村人は特別Pと親しいというわけではないため、Sの畑を「Pの畑」と呼ぶのは一般的な呼び方であると推測される。また、ロングハウス6に住むT兄弟はどちらも未婚の成人男性であり、彼らの生家に住んでいる。T兄弟は2人で土地の開墾を行い、人々は彼らの畑を呼ぶ際にどちらか一方の名前をとって呼ぶのではなく「T1とT2の畑」というように呼んでいた。

サラワクの焼き畑社会ではこれまで慣習的な土地保有制度がとられており、開墾した人にその土地を利用する権利が与えられ、土地が耕作されているかまたは土地に耕作のしるし(通常、果樹)がある限り、その土地の権利は保証される[ホン 1989]。そのため、ある土地に耕作のしるしが見られなければ村人は自由に土地を開墾し、自分の畑として所有することができる。使用している畑の多くはロングボートで往復が可能な範囲内の川岸の丘陵地や、道路脇の山である[写真 10、11]。

畑は1年ごとに新しく開墾しなおし、栄養を含んだ土地を使用する。開墾した土地は親から子に継承されるが、実際に一度使用した土地が再び森を形成するまでには十数年必要となるため、それぞれの家族は毎年自らの手で新たな土地を開墾していく必要がある。

### 2-2-2 陸稲の作業工程

陸稲に関連した作業は土地の開墾、焼畑、播種、草取り、収穫がある。筆者が観察したのは開墾から播種に至るまでの過程である。詳細な播種の内容については次段でみるが、この段では全体の大まかな過程を整理する。

以前は斧により行われていた土地の開墾作業は、現在



【写真 10 川沿いにある畑】



【写真 11 道路沿いの畑】

ではチェーンソーを用いて行われている。伐採した木々を炎天下の中、数日から一週間程度乾燥させ、その後燃やし灰にする。この火入れの作業はヌトン (Nutong) と呼ばれる [図 12]。このとき、後の播種作業の妨げにならないよう大小問わず木々はできる限り燃やして灰にすることが好ましい。人々はこの作業を重要視しており、焼いた後の畑の美しさを互いに評価し合うこともあった。

美しい畑、良い畑であると評価されるのは木々がよく燃やされて障害物が少ない状態の畑を指し、良くない畑とされるのは焼け残りが多い畑である。木やその枝が燃え残っていると播種の時に動きが制限され、作業の効率を著しく下げることがある。例えば村長 A の 3 か所目の畑の火入れ終了後、人々は他の畑での播種作業の帰りに畑が見える場

所に立ち止まり、きれいに燃やし尽くされた畑を褒めていた。一方村人 X の畑では、元来陸稲栽培作業を行わないプナン族の人々が代理で畑を焼いたため、枝や大きな木が多く燃え残っていた。播種作業中、枝に行く手を遮られたり何度も大木を迂回したりよじ登ったりする必要があり、作業効率は著しく下がった。そして村人は「プナン人は焼畑を行わないから作業が粗雑だ」と畑の様子にコメントしていた。



【写真 12 燃やされた後の畑】

## 2-3 クニャ (Kenyah) 族の播種

### 2-3-1 作業工程

地面に作物植え付けのための穴をあける作業のことをクニャ語ではヌガン (Nugan) と呼ぶ。しかし広義には播種に関わる全体の作業もヌガンと呼ぶ。ヌガンは 7 月末から開始され、9 月の中旬までには終了する。それはサラワク州における雨期が 9 月からであり、雨期の開始までに作業を終わらせる必要があるためである。ヌガンが始まると村人は、原則日曜日以外は畑へ行きヌガンを行う [写真 13]。ヌガンには、男性がトゥガン (Tugan) と呼ばれる先の尖った棒で地面に穴をあける作業と、女性がその穴に糞をいれるルマ (Lema) と呼ばれる作業の 2 段階がある [写真 14、15]。畑が急勾配の丘陵地に作られていることがほとんどで、熱帯の気候も相まって作業は過酷である。穴に糞を入れたあとはそのまま放置し、女性が穴を埋めるといったことは行われない。ヌガンはまず畑への移動から始まる。畑は広い土地を要するため、集落のすぐ近くの土地が開墾されることはない。そのためロングボートか車を用いて移動しなければならない距離に畑は作られる。村に道路ができる前までは、畑は川沿いに作



[写真 13 スガンをする人々]



[写真 14 穴あけを行う男性達]



[写真 15 ルマ(播種)を行う女性たち]

られ、ロングボートが主な移動手段であった。しかし、道路ができ常に 2 台ほどの車を利用できるロング・モウ村では、畑は道路の両側の丘陵地にも作られている[資料 3]。ロングボートはほとんどの成人男性(既婚、未婚に限らず 1人で暮らすことができる程度に自立した男性を指す)が所有している。車で移動や長距離の徒歩移動が必要となる道路脇の畑に比べると、川沿いは畑が作りやすい。集落から離れた道路沿いに畑を開墾する村人もいるが、移動に時間がかかるため出作り小屋は欠かせない[写真 16、17]。



[写真 16 連なった出作り小屋]



[写真 17 道路沿いの出作り小屋]

そこに数日～数週間滞在しながら村人は様々な作業を行う。スガンの際には、限られた台数の車に村人が最大限まで乗り込むことはもちろんだが、ロングボートにおいても燃料の節約のため、村人同士で乗り合いをしている様子がよく見られ

た。

畑に着いてまず行うのは食事である。移動開始が朝 6 時から 7 時頃と早いいためそれは朝食も兼ねるが、その日にヌガンを行う畑の所有者から参加者へのもてなしの要素が大きい[写真 18]。ホスト側は前日から食事のために多くの野菜や鶏、イノシシの肉を調理し、ビールやブラッと呼ばれる米から作られる酒の支度をする。ビールは街で調達するもので、ブラッは各家庭の自家製である。夫婦 2 人で 20~30 人ほどの食事を準備するのは大仕事であるため、兄弟姉妹が互いの家を行き来し手伝うことが多い。



[写真 18 出作り小屋での食事の様子]

料理の中でもタリ(Tarit)の葉に包まれたご飯は、村人の重要なエネルギー源であり、大量に準備される[写真 19]。



[写真 19 タリの葉で包まれたご飯]

タリの葉は新芽の時は煙で燻したバコの巻き紙にもするが、

大きくなると食物の保存に用いられる。1 回のヌガンに何人の村人が訪れるかははっきりとはわからないが、どの家庭でも一度に 60~80 個程度のご飯を用意する。最終的にそのご飯は 1 人あたり 3~4 個配布される。ヌガン作業の前であるため食事時間はおよそ 10 分程度で非常に短い。ビールは、ヌガン期間中作業終了後に必ずといっていいほど頻繁に振舞われるが、入手量が限られているため日常的には飲まれない。そのためビールはヌガン際のもてなしとして用意していると考えられる。しかし、必ずしも毎回のヌガンでどの家庭もビールを用意できるわけではない。ビールは、村から街に食料品などの買い付けに出る人に依頼するか、普段は村にいる自身の家族に村まで持参してもらい、もしくは村にある小さな商店から購入することで調達される。しかし個人商店にあるビールの量は限られており、ヌガン開始後 3 週目には商店のビールも全て売り切れた。あるヌガンの時、ビールを用意しなかった O の畑のヌガン時に老人 M が「どうしてお前の畑ではビールがないんだ」とくっかかり、妻の O が泣くということがあった。この件はその後、村人の間で M の行動を責める形で噂になっており、必ずしもビールがあるわけではないということが共通認識としてあることがわかる。また、その後 1 週間ほど M の言動を揶揄し、その家が所有していないものに対し「どうしてこの家には O O がいないんだ!」と言う冗談が流行した。

食事が終わった者から農作業に適した丈の長い服装に着替え、多くの人がサオン(Saong)と呼ばれる笠をかぶる。女性の中には日ざしと蜂を防ぐためにムスリム女性がいる簡易トゥドン(Tudung: 髪を隠すためのもので伸縮性があり、裾が長いため農作業に適しているといえる)を使用する人もいる。大半が支度を終えると、土地の神に対しヌガンの成功と豊かな実りを願う祈りが捧げられる。様式は十字架を用いたキリスト教式である。地面に十字架を立て粉が入った袋を根元に置き、教会管理者か、該当者がいない場合は畑の所有者が祈りを捧げる。多くの人がこの祈りの場に参加するが、まれに精霊信仰を主張する人や祈ることを重要視しない人が先に開始地点に向かって畑を登り始めることもある。作業に用いられる道具は、男性が用いるトゥガンの他に、クリヤン(Keriyen)という女性が粉を入れるポシュットのようなものがある[写真 20、21]。トゥガンは木で作られ、尖った先端は鉄で補強されている。男女の作業は分かれており、女性がトゥガンを用いて穴あけをすることはない。



【写真 20 トウガンを持つ男性】



【写真 21 籾を入れるクリヤン】

女性は男性の作業が始まってから 50 メートルほど穴あけを終えるまで待つて播種を始める。しかし、男性が女性の作業であるルマ(播種)をすることは数人の男性に限ってよく見られた。ヌガンに参加した女性の数が男性よりも少なかった場合など、1~2 人の男性が女性と共にルマに参加していた。

### 2-3-2 リーダーと順番

ヌガンでは毎年ヌガンリーダーを持ちまわりで決めており、

ヌガン開始日は村人全員がリーダーの畑に集って作業する。翌日以降は、あらかじめ決められている、毎年変わらない順番に従って日程が定められ、人々は自分の該当日には畑にヌガンをする必要がある。日程に従ったヌガンの実施は規則であり、仮に自分の畑の火入れなどの準備が終わってなかったとしても、畑の一部のみヌガンを行い、大部分は後日のために残しておく。ヌガンの順番は村の中で古くから決められており、新たに生まれる子供も、生まれた時から将来どの順番でヌガンを行うのか、すでに決まっているといわれる。しかし親から独立し、自分の畑を持つまでその順番は認識された上でパスされ、畑を持つ次の村人の順番が優先される。また、ヌガンの準備が終了しなかった者の順番も同様にパスされ、次に自分の順番が回ってくるまで待つか、他の村人のヌガンが行われない日に行わなければならない。ただしパスされたとしても畑の一部に行うヌガンは実施する。

彼らは、その順序に従い 3 周ヌガンを行うが、3 周目はヌガン後に稲が芽を出さなかった箇所へのヌガンをするときされており、自分の家族だけで行う。しかし、実際は後にみる A の畑など 3 周目になってもまだ畑を開墾し、共同でヌガンを行う者もいる。

ヌガンの順序は、リーダー以外は毎年変わらない。No.1 から No.5 まで 5 人の村人がいると仮定し、ある年のヌガンリーダーを No.3 とすると順番は No.3、No.1、No.2、No.3、No.4、No.5、No.1、No.2...となる。ヌガンリーダーの人物の畑にヌガンを行った後のヌガンは決められた順番に従い行われ、リーダー自身の元々の順番も確保されている。そのため、リーダーの畑が 1 か所しかない場合は 2 回目のヌガンを行うために、1 回目のヌガンで全て終わらせずに、ヌガンしない場所を残す場合もあるという。多くの村人は 2 か所の畑を開墾しているが、人によっては 1 か所のみ開墾する人もいれば 3 か所開墾する者もいた。

ヌガンリーダーのヌガンに関する実務は、ヌガンの成功することをヌガンが開始される日より前に教会で祈ること以外にはほとんどない。日程や順番、全体の進行状況の把握、村人の参加の指示などにも一切関与することはない。リーダーは村長やその他の村の役職とは関係なく選出される。ロング・モウ村においてヌガンを行う共同作業のグループは 2 つあり、リーダーも 2 人存在した。この 2 つのグループは、ロング・モウ村の成立の際に述べた民族のまとまりで分かれている。ひとつがルポ・タウ、リナウ、ルポ・エンカウ、の 3 氏族によるもので、他方がルポ・ジェンガン氏族によって作ら

れるグループである。このうち筆者は常に村長 A が所属する前者のグループのヌガンに参加していた。こちらの 3 氏族で構成されたグループをグループ 1、ルボ・ジェンガンのみのグループをグループ 2 と呼ぶことにする。当初、ヌガンは村全体でひとつのグループとして行うと考えていたが、ヌガンの初日に同行したグループ 1 とは別の場所でヌガンをする人々を目にした。その際村人に話を聞き、ロング・モウ村において 2 つのヌガングループが存在することを確認した。

村人は、自分が所属するヌガングループの中で互いの畑のヌガンに参加したりしなかったりする。毎日のように他者の畑に行く人がいる一方、そういった人が全く参加しないヌガン先もあり、参加・不参加の意思決定はそれぞれの村人の判断によるものだと推測される。その動機として考えられるのは村人自身の血縁・友人関係であることか、「自分の畑に来て手伝いをしてくれたから、自分も相手の畑に行き返す」という互酬性によるものである。また、村人の中には「自分の畑に来てもらいたいから他人の畑を手伝いに行く」と言う人もいた。次の章でみていくが、ロング・モウ村では村落内で行う大きな共同作業がほとんどない。漁撈や狩猟、家の建設などは村人全員で参加するものではなく、個人の間関係で人を集めて行われるものである。そのため、村をあげて大々的に行われる彼らのヌガンには、単なる農作業やその効率化という目的以外にもいくつかの特別な性質があると考えられる。このことについては第 4 章で分析する。

### 2-3-3 スリンピット (Selimpit)

ヌガンの作業には、スリンピット (Selimpit) と呼ばれる禁忌が存在する。それは作業を開始した直後、ヌガンを開始した地点から畑を斜面に垂直方向に一往復するまでの間に犯してはならないいくつかの行為である。この一往復の間村人は、スリンピットを犯すことを避けるため休憩を取らず、水も飲まず、タバコやビンロウジで一息入れることも会話することも控え、集中してヌガンを行う。

ヌガンの際に足を止めて休憩をすることは、スリンピットの禁忌のひとつである。息を整えるために立ち止まることや水を飲むこと、またタバコやビンロウジを口にするために止まることもこれに含まれる。そのためスリンピットが適用されるヌガンの開始直後は、無言で作業をし、ある程度ヌガンが進みスリンピットの適用範囲外に出たと判断された箇所から会話や休憩を自由にとり始める。もし仮にヌガンが開始された直後に足を止めて休憩をすると、その後疲れやすくなる、集中

できずだらだらと作業をしてしまいその日のうちに作業が終わらなくなると考えられている。

他にスリンピットとして村人が主に気をつけるのは、足を滑らせることと身につけた物を落とすことである。始めの一往復の間にヌガン参加者の誰かが滑ると、ヌガンに参加した者が滑落し大怪我をする、最悪の場合は死亡することもあるといわれている。急勾配の畑は常に足場が悪く、土がむき出しの山肌は非常に滑りやすい。火入れ後の畑は根を張った木々もなくなり掴むものも少ないため、慣れないと歩くことも困難である。手にした穴あけ用の棒トゥガンや穀殻入れのクリヤン、笠のサオンにタバコやビンロウジを入れた袋などの所持品を落とすこともスリンピットに含まれ、滑落の発生を意味するとされる。

村人は筆者が畑へ行くことまでは許可したが、「ヌガンが始まったらついてくるな」「小屋で待っていて」と言うことが常であった。面倒見の良い H は「作業が大方終わったら呼ぶから、それから来ていい。人が呼ぶまではここで待っているんだ」と言ったが、いつまでたっても誰にも呼ばれず小屋で待ちぼうけすることもあった。スリンピットについて知るまでは、急勾配での作業であることから筆者自身の体力を心配されたのかと考えていた。ヌガンが始まり数日経った後、村人からスリンピットの話を聞き、そこで初めてスリンピットを恐れ筆者がヌガンに参加することを拒んだのだと理解した。中には「古い習慣、考えだから気にしなくてもいいと思う」と言う若者もいたが、筆者が播種を行う女性たちに近づくと、あまりいい顔はされなかった。ヌガンが開始され 4 週間経った時ですら「大変だからついてこなくて大丈夫」「あなたは小屋に戻って、飲み水の用意をして」「ここは大変だからしないでいいよ」と、言われるほど、クニャ族はこのスリンピットの慣習を大切に守っている。サラワク先住民と森林破壊の実態について調査していたホンはこのスリンピットについてクニャ族のアダット (慣習法) として著書の中で触れ、種まきの期間中に畑でご法度を破ると「罰金」をはらわなければならないとしている [ホン 1989]。しかし、今回調査中スリンピットが犯された場面には遭遇せず、罰金のやり取りなどの事例は見られなかった。

### 2-3-4 ンガノ (Ngano)・シラム (Siram)

ヌガンの作業を一通り終わると、人々は再び小屋に戻り食事をとり、酒を飲みながらくつろぐ。ビールは、普段村にないため民族伝統の酒であるブラッよりも好まれている様子

であった。畑のホストはどの家も 50 本近くのビールを用意し、作業終了後には全てを飲み干す。人々が食事を終え、酒を飲み出す頃に始まるのがンガノ(Ngano)を始めとした、いたずらのような儀礼的遊戯である。ンガノとは、焼き畑をした後に残された炭を他人の顔に塗り黒くすることを指す。炭に厄除けの効果があると考えられているために炭が用いられている。ンガノは通常、村人の中でもそれを積極的に行う住民から始められる。彼らはまず、自分と同様にンガノを好んで行う人にンガノを行い、そしてその人が仕返しにンガノを始めることで他の村人にも一気にンガノが広まる。多くの場合、最終的には好む、好まざるに関わらずほぼ全員が顔を黒く塗られる[写真 22]。



【写真 22 ンガノ中に出作り小屋に逃げ込む人々】

また、ンガノがほぼ全員にされるとその後はシラム(Siram: マレー語。クニャ語ではメースップ: Mesup というが、マレー語が用いられることが多かった)と呼ばれる水かけが行われることが多い。多くの畑が小川のそばに作られているため、水は手に入れやすく、水かけは盛大に行われる。水がない場合ビールや飲み水なども用いられ、相手が食事中であろうが出作り小屋の中であろうが、子供だろうが大人だろうが水がかけられ、あたりは水浸しになる[写真 23]。その他、ンガノもシラムも行われた後に車のスピーカーやカセットデッキから伝統音楽が流され、人々が踊りを楽しむこともあった。

村人はンガノとシラム、そして時には踊りを楽しみ、大声で笑うことで作業後に和気あいあいとした楽しい雰囲気



【写真 23 複数で一人を捕まえシラム(水かけ)をする様子】

生まれる。彼らは、播種作業中に畑で自分たちが笑い楽しむことで畑の神を喜ばせることができ、畑の神が喜べば畑の作物は豊作になると信じている。逆に諍いや喧嘩などは御法度である。顔を洗った直後に再び黒くされたり、時には炭に油をまぜたものを顔だけでなく腕や服に塗られることもあった。一度筆者が思わず憤ってしまったことがあったが、「やられても怒るな、怒るな」と誰もが笑いながら言った。しかしヌガンが始まり 2 週間が経過した頃、ンガノやシラムをする回数は一気に減った。何か信仰的なものが関係しているかと思っただ、「同じことばかりやって飽きた」「今日(のヌガン参加者に)は積極的にンガノを行う人が少ないから、しない」といった返事が聞かれた。ヌガン開始の頃はみな楽しんで行っていたンガノやシラムであるが、日数の経過と共に人々は自然とそれらをすることがなくなった。このことから、ンガノやシラムは儀礼と楽しみが混在している行為であり、村人達の間では毎回行う必要があるとは考えられていないことがわかる。

### 第 3 章 村でみられた共同作業

次に、共同作業という観点からロング・モウ村で行われたヌガンと他の作業との違いについて比較したい。次に、村人全体が参加した作業から特定の人物数人規模で行われた作業など、いくつかの事例を述べる。

### 3-1 道路補修作業

まず、村の中でも村長を含むヌガングループ 1 の男性を中心に行われた共同作業が 8 月 4 日の道路補修工事である。8 月 1 日未明から降り続いた大雨により、ロング・モウ村ではモウ川の氾濫や地滑りが起こった。川の氾濫は 1 日の昼までにはおさまったが、地滑りにより村と街を繋ぐ唯一の道路は分断されていた[写真 24]。



[写真 24 地滑りにより分断された道路]

道路沿いにある畑はその分断箇所よりも先にあり、その後のヌガンのためにも早急な復旧が必要とされた。本来 4 日は L のヌガン日であったが、L の畑が地滑りを起こした道路の先にあるため、ヌガンを手伝うことはできなくなった。

この日、A、H、J、L、S、T 兄弟、W、ZZ と学校で働く男性 1 名の合計 10 人が道路復旧作業を行った。現場について男性らは薪を集め、道路の復旧作業と簡易小屋の作成、食料の調達と作業ごとに分かれ 1 日がかかりで補修作業を行った。また、狩りに行った T1 によってイノシシと子ザルがとられ、そのうちイノシシの内臓はその場で昼食として食べられ、肉は作業終了後に参加した 10 人で平等に分配された。本来であれば、ロング・モウ村において道路を管理する役職についている E が先頭となって対処すべきであるという村人もいたが、この補修工事に関し E は何も言わず、また作業に参加することもなかった。

### 3-2 牧師の歓待準備

8 月 9 日は数カ月に一度のロング・サン村から牧師が村を訪れ礼拝をする日であり、村長の家を中心に女性たちが歓待の食事の準備をしていた。この日は村長の妻 a の他に、

ロングハウス 4 に住む n、o と住居 5 に住む q、r、s、さらに住居 5 に同居する小学校勤務の女性の計 7 人が作業に参加していた。この 7 人は、ヌガンで村長夫妻が行く畑で頻繁に顔を合わせており、大半が村長夫妻の血縁関係にある。しかし、実際に調理作業を行っていたのは a、r、小学校勤務の女性の 3 人のみで、他の女性らはビンロウジを噛んだり世間話をしたりしているだけであった。具体的な作業をせずとも、手伝いの意思をみせその場に顔を出すことに意義があるのかと筆者は考えたが、一方で歓待の支度をした手間賃として支払われるお金があり、それは参加者に平等に配られるためそれを目的に行ったのではないかという村人もいた。夕食後に行われた伝統舞踊の披露後まで部屋に残り、飲み物を用意したり後片付けを行ったのは r と小学校勤務の女性のみであった。この作業は共同作業という形をとっているように見えるが、実際は村長夫妻の血縁者という一部の人によって為された作業である。

### 3-3 狩猟、漁撈

狩りは、男性 1 人で行われることもあれば数人で行われることもある。ヌガンが始まる前の 7 月 26 日には、J が T 兄弟と共に狩りに行っていた。狩りは男性にとって娯楽のひとつでもあり、ヌガン期間中に狩りを積極的に行えなくなるのを不満に思う男性もいる。T2 は、一度ヌガンが開始されると毎日作業があり、狩りに出かけられなくなると愚痴のように話していた。しかし実際はヌガン期間中も狩りに出かける人がおり、T2 もその中のひとりだった。

J と T 兄弟は狩りに行った日、まずロングボートでロング・スラン村まで向かい、そこに停めてあった T1 の車でロング・モウ村へ帰り、その道中狩りを行った。J がイノシシを一頭仕留めたが、T 兄弟が所有するロングボートと車を使って狩りに出たためか、J はイノシシの肉の多くの部分を T 兄弟に分けた。

また、7 月 22 日から 23 日にかけては村長夫妻と L 夫妻、J の 5 人と筆者は、L 夫妻の手作り小屋を拠点に川で漁撈を行った。漁は刺し網を用いて行った。川に網を設置し、時間をおいてから網を回収しそこに刺さった魚をとる方法である。A、L、J は川沿いを歩き小屋から 2~3 キロメートルほどのところで網を仕掛け、翌朝確認に行った。川は幅 5 メートル、深さ 3~4 メートルの大きさで、流れは緩やかだが網を張る作業は複数で行ったほうが楽に行える。彼らは 2 つの網を用意しており、交代しながら端を握ったり泳いだり、30 分ほ

どで網の設置を終えた。aとlは漁に参加せず、小屋で待機していた。ふたりは夕方になると小屋のすぐ後ろにある小川で食料となるカエルを獲っていた。しかし、lは普段Lとともに漁に行くと話し、またaも以前子供とL夫妻と漁に行ったことがあると言った。その際はH夫妻、T兄弟もいたと言い、大人数での漁だったと想像できる。翌朝、大きいものは40センチメートルほどの魚が5~6匹獲れ、aとlが調理した。

これらの2つの事例から、クニャ族が行う狩猟や漁撈はある程度共同作業の形で行われるものの、村をあげて行われる規模のものではなく個人の間人間関係に基づいた、数人規模で行われる作業であることがわかる。それは血縁関係もしくは友人関係のまとまりであることが多い。次に、筆者の滞在中ヌガンを除いて村で唯一多くの村人が参加し、共同作業の形で行われた事例についてみる。

### 3-4 芝生整備と清掃作業

8月13日には、村にあるクリニック周辺の草刈り・清掃作業が行われた。これはクリニックの玄関に張り出された紙によって告知されており、当日は村中から人々が集まり草刈り機で草を刈ったり、クリニックを囲う溝の掃除などを行った。作業には男女問わず多くの人々が参加し、男性は草刈りを、女性は溝掃除や掃き掃除などを行った。参加者の中にはヌガンにおけるグループ1に所属しながら、普段はヌガンで見かけない人やグループ2に所属する人もいた。そのため、この作業は村全体に対して呼びかけられたものであるということがわかる。しかし、ヌガンの作業に比べると60代以上の参加者はほとんど見られなかった。また、グループ2に所属するルポ・ジェンガンの参加者は数人見られたものの、その母数から考えると少数であったといえる。

### 3-5 建設作業、葬式

その他に村でみられた共同作業は、家の建設と葬式がある。しかし建設作業も村人が総出で手伝うといった様子はみられず、常に3、4人ほどの男性が作業をしており、その家の所有者と近い血縁関係の者で行われていると推測された。ルポ・ジェンガンのロングハウス群では一人で作業をしている男性も見かけることがあった。

また、村で葬式が行われた際、その支度には多くの村人が参加していた。特徴的であったのは、女性の参加よりも男性の参加が多かったことである。死人が出たことがわかったのは8月22日の朝だが、その日もヌガンが行われていた

め、村の男性達は、ヌガンから帰った午後から早急に棺桶づくりを始め、夜までには完成させた。夜になると、村中の人々が死者のでたロングハウスのルアイ(廊下)に集まり、それぞれが小さな声で会話をしていた。死者を悼み、朝まで夜通し語り合うのがクニャ族の習わしであるという。死者が出た家の住民は、祭壇の支度をし、ロングハウスを訪れた村人のために炊いたもち米や飲み物を用意した。食事を住民に配る時は、家族ではない数人の男性が率先して手伝っていた。彼らは、葬儀に行く前「自分たちは棺桶づくりに参加しなかったから、それ以外の手伝いをしに行く」と話していた。牧師の歓待準備に多くの女性が参加していたのに対し、葬儀では女性が何かを積極的に手伝う様子などはみられなかった。棺桶づくりに参加しなかった男性が積極的にその他の手伝いをする様子などから、葬儀の際に男性には何かしらの形で作業に貢献する必要があるのではないかと考えられる。伝統的には朝まで残るとされる葬儀であるが、時間が経つにつれ子供や高齢者、そして女性などから少しずつ自宅へ戻り、夜11時ごろにはルアイに座っていた人々の7割近くが帰宅した。

### 3-6 小括

このように、ロング・モウ村で行われる共同作業は多いとはいえ、いくつかの作業もまた個人の身近な人同士で行われるものである。そして現在村で行われている祭りなどはなく、多くの人々が集まって伝統音楽や踊りを楽しむ機会は結婚式や、村外から大切な来客が訪れた時のみである。家の建設や葬式などは当事者と近い人によって取り行われ、狩りや漁撈は血縁や友人関係を中心に楽しめる。道路の補修作業や牧師の歓待の支度などは、家族や友人よりも参加者の広がりを見せるが、どちらも必要に応じて偶発的に一部の人によって行われるものであり、村の大多数の人が関与するということはない。そしてクリニック周辺の環境維持活動は村全体で行われるものであるが、これは村人全員にとって必要にせまられた際不定期に行うもの、かつ共同体全体に関係するため行われるものである。したがって個人で行う必要はなく、ヌガンの場合と異なり共同作業で行うことの合理的な説明がつく。

それでは、なぜクニャ族の人々は陸稲栽培のヌガンだけを共同作業で行うのだろうか。また、ヌガンやその参加について人々はどうのように考え、その意味付けをしているのだろうか。これらの点について次章でみていく。

## 第4章 ヌガン Nugan(播種)の事例分析

4章では、事例からなぜヌガンが他の作業とは異なり共同作業として行われているのかについて、その意味を分析する。日々のヌガンからはどの畑でも共通して行われる儀礼的な行為や、明言されることのないヌガンの象徴的な性質がみられた。

ヌガン日程と参加者、その日のヌガンの特徴などは資料4に簡単にまとめている。またそれぞれの畑へのヌガン参加者、日々みられた事例については資料5、6に記載する[資料4～6]。

### 4-1 実施日程

まずひとつ目にあげられるヌガンの大きな特徴は、ヌガンを行う順番と日程が決められていることである。ヌガンの順番はすでに決められおり、毎年ヌガンリーダーに任命された村人の畑のヌガンを行った後は、その順番に従ってヌガンが行われる。自分の畑の該当日には、仮に畑がまだ播種が行えない状態であったとしても畑の一部に播種をしなければならぬ。そのため村の住民は定められた順番にヌガンを行うことを重視し、ヌガンを中止しないように努力する。村人がこのように行動するのは、決められた日のうちにヌガンをしなければならないという決まりの他に、一度自分の畑の日程を逃すと次にやってくる自分の番までは1週間以上待つことになることも理由のひとつであると考えられる。

例えば8月1日にヌガンを行うはずのHの畑は川沿いにあったが、当日朝は大雨で川が氾濫していた。そのためこの日のヌガンは中止になると考えたが、Hも他の村人もすぐにヌガンを中止にせず、2時間ほど待ち続け様子をうかがった。そして人々は川の水が引いた後に畑へ移動しその日のうちにヌガンを行った。

また、8月4日にヌガンが行われるはずであったL夫妻の畑は大雨による地滑りで道路が分断され、村人が集まっていたヌガンをその日に行うことができなかった。しかし、L夫妻はH同様ヌガン該当日に播種を行うため、該当日よりも前の段階で地滑りを起こした道路を通り畑へ行き、2人でヌガンを行った。

播種を行うことのみが目的であれば、その日の天候や焼畑作業の進捗状況に合わせて予定を柔軟に変更することがより合理的である。しかし、人々はヌガンの順番や日程に規則性を与え、それを守ろうとしている。ここから、ヌガンに

おいて定められた日程とヌガン実施の順番には重要な意味があることがわかる。

### 4-2 儀礼の存在

ふたつ目は、ヌガンにおける儀礼の存在である。アジアに広く分布する稲作農耕民は、農作業や収穫などに合わせて儀礼を行う。クニャ族のヌガンでも、作業の開始前に祈りが執り行われている場面がみられた。

まず、その年のヌガンリーダーに任命された者はヌガンの開始以前に教会で村の人を集め礼拝を執り行う。そこでは、その年のヌガンの成功と豊穡が祈願される。そして、それぞれが自分の畑でヌガンを行う際も、作業前に教会管理者を中心に祈りが行われる。祈りをあげる者は、畑の小屋から近い位置に十字架をさし、その根元に播種で使用する数種類の穀殻の入った袋を置いて祈る。村の多数はキリスト教を信仰しているが、精霊信仰を主張する一部の村人は祈りを重視せず、他の住民が祈りを行っている際に先に畑に踏み入ることもある。しかし、稲作作業以外の生業活動においては祈るという行為がみられず、クニャ族も他の稲作農耕民と同じように稲作を他の生業活動と区別し、重要な作業であると認識していることが推察される。

### 4-3 禁忌の存在

#### 4-3-1 スリンピット

クニャ族のヌガンにはスリンピットと呼ばれる禁忌が存在する。スリンピットは不注意によって犯されるものがほとんどである。そのため、経験の浅い若者や部外者がヌガンに参加する際にはスリンピットが犯されるのではないかと村人が過敏に反応する。先に紹介した事例で述べたが、よほどのことでなければ日頃の筆者の行動に口を挟まない村人の多くが、筆者がヌガンに参加しようとする時「始めは小屋で待っていて」「誰かが呼んだら来ていい」「小屋で食べものと子供のことを見ていてほしい」と繰り返しヌガンに参加しないように諭した。一部の参加者に声をかけられたので、ヌガンが半分以上過ぎたあたりから播種作業を行う女性たちに近づいたこともあったが、筆者に進んで穀を渡す人はほとんどおらず、また「なんで来たの」ととがめるように尋ねる女性もいた。

スリンピットが適用されるのはヌガンが開始され人々が畑の端で折り返し、出発地点まで戻る一往復だとされる。しかし、事例からわかるように、村人はそれが仮にヌガンの終了

に近づいてからの参加であっても、禁忌を犯されることを嫌がり、筆者には作業に参加しないように何度も声をかけていた。

8月17日のMの畑でもスリンピットに関連していると思われる事例があった。この日は、普段ヌガンに参加しないUが、義父の畑であるMのヌガンに参加していた。Uは経験が浅いわけではないが、初めはヌガンに参加せず、人々が畑の半分近くを通過するころ畑に踏み入った。これは、普段はヌガンに参加しておらず、作業に不慣れなUがスリンピットを犯してしまうことを恐れ、スリンピットの該当箇所を避けての行動だと推測される。Uの行動はいわば一種のマナーのようでもあるといえる。

#### 4-3-2 男女の作業

ヌガンにまつわる禁忌はスリンピットだけではない。スリンピットは例えるなら親から子に教えられることによって継承されていくような、明示された禁忌である。一方男女の分業に関して、はっきりとは明示されないが、暗黙の禁忌があることがわかった。ある日のヌガンで、人々から参加をしないように諭されていた筆者は、男性が穴あけに用いるトゥガンが一本余っているのを発見し、それを使って穴あけをしながらヌガンに参加した。それに気づいた男性から何か声をかけられたが、距離が離れていたためよく聞き取れず、そのまま穴あけをしながら斜面を登った。穴あけをしている男性たちに近づいていくと、中には苦笑いのような笑みを浮かべる老人もいた。英語が少し話せるLから「それ(穴あけの作業)はしなくていい」「体力を使うし手をとめてはいけない大変な作業だ。君は女性たちに従って播種の作業に参加しなさい」と言われ、T2からも「しなくていい、しなくていい。その作業はしなくていいから」と何度も大げさな身振り手振りを交えて言われた。それにも関わらず筆者がしばらくの間穴あけを続けたところ、Lは「ここに穴をあけたら次はこの距離でここに2か所、それぞれの穴からまた2か所ずつ」と筆者に穴のあけ方を教えたが、その後「こういったように穴あけは男でも体力を使う難しい仕事なんだ。だから、君はその棒を持って下りて播種に参加しなさい」と言った。そこからは、筆者は女性達と共に播種に参加した。この日、男性ながら女性と共に播種に参加していたHは、筆者に対して「どうして穴あけに参加したの、それはしなくてもいいんだよ」と諭した。後で、離れたところからその現場を見ていた別の村人に聞いたところ「女が男に混じって穴あけ作業を行うなんてありえ

ないことだ」と強く批判された。男性が女性の作業である播種を行うことは禁忌として明示されていないが、女性が男性の作業である穴あけを行うことは、直接その理由を口にするのが憚られる禁忌のひとつであると推測される。

この禁忌は男女がそれぞれ行っている作業が性を象徴することに関係すると考えられる。まず、ヌガンにおける男女それぞれの作業とは、トゥガンという棒状のものをを用いて稲が育つ地面に穴をあけること、そして、あけられた穴に稲のもととなる籾殻をいれていくことである。2章1節の稲作儀礼でふれた男神、女神を想定した綱引き儀礼のように、クニャ族のヌガンでも男女の性別によって分けられた作業が、性的象徴、つまりは生殖行為を象徴している可能性がある。女性の作業を男性が行うことが禁忌ではないことには多少の疑問を抱くが、このような文脈で理解すると男性の作業を女性が行うことは、重要な性的禁忌である可能性が高い。

このように、ヌガンでは女性が穴あけの作業をすることが好まれない一方、普段の農耕では女性もトゥガンのように細長い木や、先端を削った木などで穴をあけ野菜の播種を行う。ある日のLの畑では、妻1が、トウモロコシやティモン(Timon)と呼ばれるキュウリに似た野菜の播種を行う際に、先のとがった棒を持ち畑を歩きながら穴あけを行っていた。ここから、日常的な農作業では女性が播種のために穴あけ作業を行うことは禁忌ではないが、同じ作業がヌガンでは特別な意味を持ち禁忌になると考えられる。

#### 4-4 もてなし

次に、ヌガンでみられるもてなしの存在について紹介する。ヌガンでは、作業に参加した者のために食事や酒が用意される。地域の祭りや村での集まりでは参加者に食事が用意されたり、なおらいがあるように、ヌガンでも大量の米や食事、村には普段ないビールなどが用意され、その場で食べきれない分は持ち帰り用として分配される。そして食事には、村人が米より大切だと考えるもち米や多くの肉が準備される。例えば、あるときAやHは、彼らのヌガンのもてなしのために鶏を2羽さばいた。通常鶏がさばかれるのは、来客時やいくつかの家族が共に食事をする際などである。また、通常の食事では肉を使った料理は一品のみであるが、ヌガンのために準備する料理は、多くの家庭が肉料理を2品用意していた。

また、作業の終了後に振る舞われるブラツという自家製の酒やビールも、普段から村にあるものではない。ヌガンの際

のもてなしとして、作業に参加した者がより好むもの、喜ぶものが特に意識され、用意されているといえる。集落から離れた出作り小屋に住む AC 夫妻は、自分たちのヌガン前日に車を持つ J にビールを購入してくるよう依頼した。また W は、ブラッがいつも飲めるものではなく、ヌガンのためにこの時期にのみ作られていると語った。ブラッは通常、作業が終了した後に参加者にふるまわれる。しかし、8月6日の Z の畑では、Z が作業の途中からブラッを取り出し、景気づけのように次々に参加者にふるまうということもあった。これらの一連のもてなしには、通常みられないもてなしが行われていることなどから、参加者と共にヌガンが終了したことを喜ぶ「打ち上げ」的な意味があるのではないかと考える。

陸稲栽培において、播種は収穫前に行う最後の大きな作業である。そこで、彼らはヌガンを共同作業で行い、収穫を除いた全ての作業の終了を共に喜び、祝うのではないだろうか。それはまた、彼らがヌガンを楽しく行う動機にもなる。また、ホストがやむを得ず十分に食事を準備できないこともあるが、場合によっては人々はその不満を出さないわけではない。例えば、8月19日の AC 夫妻のヌガンでは、朝から始まったヌガンが夕方 4 時ごろまで続いた。作業途中にビールがふるまわれたものの、AC 夫妻が参加者に休憩を促すことも昼食を用意することもなかった。なぜ彼らが食事を用意しなかったのか、理由は不明であるが、作業後はベテランといわれる中年層の男性達でさえ疲れを隠し切れなかった。中には「参加した者に対してこんな仕打ちでは、もう次のヌガンは誰も手伝いにこないよ」という人もいた。ここから、ヌガンの際に用意される食事や酒は「ごちそう」であり、参加者はあからさまに態度には出さないもののそれを作業への対価でありもてなしとして人々に理解されているということがわかる。またこのようなもてなしが楽しまれていることから、陸稲の農作業の一段落を皆で祝う、打ち上げのようなヌガンの特徴が指摘できる。

## 4-5 遊戯的要素

### 4-5-1 ングノ、シラム

ヌガンの作業の中には、いくつかの遊戯的要素がみられる。それがングノやシラムである。ングノやシラムは、ヌガンが開始されてから毎日欠かさず行われたわけではないが、参加者達はその行為を非常に楽しんでた。人々は作業終了後に畑でそれらを行うだけでなく、集落に帰るまでの間にも幾度となく行うことがあった。川沿いの畑から帰るときは、

水浴びのために集落の近くで川に入っている人々が、ボート上の人に水をかけたり、川に引きずり込もうとしたりしていた。道路沿いの畑から帰る際は、荷台に乗った村人が幾度も運転者に車を止めるように合図し、湧き水や余った飲料などであたり構わず水かけを行った。また畑から炭を隠し持ち、車が止まった隙にングノをする人もいた。また携帯電話を持つ J は幾度も人々がングノやシラムを行う様子を撮影していた。

中にはングノやシラムを嫌がる人もいたが、村人が畑で楽しむことは畑の神を喜ばせ、豊作につながると信じられている。そのため、どれほど激しくングノやシラムをされても、人々は怒らずに笑顔を浮かべる。ングノやシラムには、そういった豊作祈願という儀礼的な意味があると同時に参加者が作業後に楽しむ遊戯的な要素もあるのである。それは、前節のもてなしの食事同様、陸稲栽培のほぼ全ての作業が終了したことを祝う打ち上げの的な意味でもある。ングノやシラムといったある種の儀礼的な遊戯を行うことで、彼らはヌガンの最後を楽しく締めくくるのである。

### 4-5-2 出合いの要素

ヌガンの最後に行われるングノやシラムには、神を喜ばせて豊穡を祈るといった儀礼的な性質がある一方で、さらに本来は若い男女の出合いの場であった可能性もある。現在のロング・モウ村のヌガンに未婚の参加者はほとんどいないが、男女入り混じって行うその楽しそうな様子から、元来このときに結婚相手探しやその意思を示したということが想像できる。実際、既婚者ばかりで行われるングノでも、友人と共に夫婦間でングノをする者もいれば、かつての恋人に対して行う者、若い男女をけしかけたりはやし立てたりする中年層の女性など、普段の暮らしからは想像できない盛り上がりを見せていた。そしてングノを楽しむには、そのような中年層の女性のように積極的な盛り上げ役となる何人かが必要である。ングノをしない消極的な人々がより多く集まった畑では、ングノや水かけが発生しにくいことは既述のとおりである。しかし、そのような人々が集落への帰り道で他の畑にヌガンに行った人々と合流し、その中にングノを楽しむ人が多くいる場合、そのまま合流した路上で水の掛け合いが行われることもあった。

他にも、老人 M が自分の畑のヌガンの際に、普段は全くヌガンに参加しない d に手伝いに来てもらったことがあった。M は d に好意を抱いていると噂されており、また普段は穴あ

け作業をする M がその日のみ女性たちの播種作業に加わり、d と会話をする姿がよく見られた。M は d をヌガンに誘うことで d と会い話す機会を得た。このような事例からも、本来はヌガンへの参加やンガノ、シラムといった行為は村における祭りのような役割を果たし、男女に出会いの場を提供していたことが推測できる。

#### 4-6 参加機会の平等性

ヌガンリーダーの畑のヌガンに参加することは参加者にとっては決まり事の一つである。そのためヌガンの開始日である 7 月 28 日に実施されたヌガンリーダーの畑には、最大人数となる 45 人が参加した。その後行われた他の人のヌガンへの参加人数は 20 人前後であったことから、リーダーの畑にはその倍以上の人が集まったことがわかる。参加者の中には、他の畑ではほとんど参加が見られなかった U や、T 兄弟の家に同居する従姉妹の女性、他の村から一時的に帰省した女性、そして普段は集落から離れた出作り小屋に滞在している夫婦などが含まれていた。特に、出作り小屋に住む人々はこの日にあわせて集落から約 30 キロメートル離れた小屋から集落に帰ってこなければならず、そのための移動手段の手配などの準備が必要であるが、ほぼ全ての人が集落へ帰り、リーダーのヌガンに参加していた。

また、E 夫妻や ab など他の村人との人間関係に亀裂ができ始めたといえる人物や自らの畑を持たない住民、そして一時的な帰省者など村にいる様々な状況の人がヌガンには参加していた。E 夫妻は畑に最後にやってきて、人々がヌガン終了後にンガノなどを始めるとそれには加わず先に集落へ帰って行った。そのため彼らが積極的にこの日のヌガンに参加しようと考えていたり、ンガノを楽しもうとしていたとは考えにくい。それにも関わらずリーダーの畑へのヌガンに参加したことから、ヌガンリーダーの畑のヌガンに参加することは人々にとっては義務に近いものであると考えられる。

参加者の中でも、村から出て外で生活をしている者は普段村のコミュニティの外側にいるにも関わらず、ヌガン参加の機会は平等に与えられていた。畑を持たない d や ab、普段は村にいない女性などもヌガンに参加していたことからそれがわかる。結果的には全くの部外者である筆者もヌガンへの参加が許されており、ヌガンには地域の者であるかどうかに関わらず誰でも参加できる、住民から許容されると考えられる。ヌガンが開始される前には、筆者に対し「もうすぐ稲作があるけど、君は参加する？」と聞く村人もいた。実際に

ヌガンに参加すると、村人はスリンピットを犯してほしくないなどの豊作を祈る儀礼を正しく進めたいと思う一方で、部外者の参加を断りきることもしない。こういったヌガンの性質は祭祀的であるといえる。

## 第 5 章 考察

### 5-1 共同作業と人々の関わり方

第 3 章ではロング・モウ村で見られたヌガン以外の共同作業の事例を、4 章では共同作業として行われるヌガンの性質について事例を紹介してきた。日常的に行われる生業活動や突発的な共同作業は、そのほとんどが近い血縁関係または友人関係の範囲内で行われている。村全体で行われる共同作業は多くなく、ヌガンはその中でも最も大きな行事のひとつで、村人は互いの畑に行き来するといった相互的な関わりを持ちながら作業を行う。

ヌガンは、友人関係や近い血縁関係を越えた枠組みの中で行われる。その枠組みが、ヌガンリーダーを始めとしたグループである。さらにはそのグループの中でも人々は、自身の血縁関係や友人関係を中心に作業の相互扶助を行っており、それは普段の漁や狩猟の際にみられる範囲の小さな人間関係から発生したやり取りと共通している。そこには、「誰の畑に手伝いに行つて誰のところには行かない」「自分の畑に来たのは誰と誰で、誰が来なかった」というあからさまな互酬的やり取りがみられる。筆者は、そのようなやり取りから人々がどのようにヌガンを共同作業として行っているか分析しようとした。当初は血縁や友人関係を越えた互酬的な関係の発生がみられることを予想したが、人々のヌガンの参加状況からヌガンの実施と村人間の互酬的な人間関係に明確な因果関係はみられなかった。そこから、村人達は機能性を求めヌガンを共同で行っていると考えたが、それだけではその他にみられるヌガンの特徴的な儀礼や行為、他の作業との差異化の理由が説明できない。例えば 1 が野菜の播種で穴あけを行ったことと、筆者が穴あけ作業に参加したことをとがめられた事例などである。この 2 つの事例を比較すると、普段の村人の生業活動にみられる行動がヌガンの際には象徴的な意味を持った行動になる場合があることを指摘することができる。そこから、人々の認識においてヌガンは他の農作業や普段の生活中的の作業とは異なった意味付けがなされているといえる。ヌガンで見聞きした様々な事例をもとに、ヌガンがもつ機能的役割に限らない象徴的意

味についてさらに考察を進めた。

## 5-2 ヌガンの象徴的意味

4章でみた通り、クニャ族のヌガンは共同作業のひとつでありながら、他の作業にはみられることのない多くの特徴がある。彼らが年間を通して行う農作業の中で、人々が互いに助け合って行う作業は陸稲栽培の中の播種のみである。当初は、効率化を考えての行動かと推測したが、むしろ播種に至るまでに行う土地の開墾、焼畑作業のほうが困難な作業であると考えられ、村人たちが播種のみを共同作業で行う理由にはならない。また自分の畑の火入れ作業を隣の畑の所有者に依頼し、まとめて行っている者もいた。2人分の畑を2人でまとめて作業するというのであれば、それは効率的に作業を行うことを目的としての行動とも考えられる。しかし、この事例では2人分の畑の作業をひとりに任せていることから、陸稲栽培において労働効率が重視されているとも考えにくい。そこから、村人は収穫作業よりも播種作業に特別な意義を見出していることがわかる。

ヌガンの特徴としてあげられるもてなしや遊戯的儀礼であるンガノ、シラムは、陸稲栽培の農作業の過程で最後の作業からの解放を祝う、打ち上げの要素があると述べた。それにより村人は祭りの後に行われるなおらいのように、誰もがヌガンを終えた達成感を感じ喜びを味わうことができる。また、音楽を流しながら踊りを楽しむことも、作業の終了を祝う行為であるといえる。

このように、村人にとってヌガンには効率化を目的とした単なる陸稲栽培の共同作業ではない祭祀的な意味がある。村では数少ない行事的な位置づけのヌガンは、稲作という生活のために欠かせない作業でありながらその機能的な意味だけではなく、ひとつの祭りとして新たな人間関係の形成や男女の出会いの場になりつつ、村人に楽しまれているのである。そして4章でみたように、ヌガンは日程が決められた上で行われる播種作業である。それには儀礼が存在し、ンガノやシラムのように儀礼的でありながら遊びのような行為も付随する。また、ヌガンへの参加は村人だけではなく、全くの部外者も可能であり、その機械が平等であるといえる。このような分析から、ヌガンが祭祀的な性質を持っていることがわかる。

では、なぜ他の作業ではなくヌガンが祭祀的な役割を担うようになったのであろうか。まず、ヌガンが一年に一回のみ行われる、村人たちにとって重要な食糧である米づくりの作

業であるからだ。街へのアクセスが可能となり、米の購入も不可能ではないとはいえ依然それは容易ではない。そのため村人は現在も稲作を行う。また、ヌガンが稲作の農作業における最後の労働であり、全ての作業の終了を示す。季節性のこの陸稲栽培作業は、村人達の生活の中で非日常と捉えられ、それを楽しむために彼らはヌガンを儀礼や禁忌などでより明確に意味づけし、稲作作業の終わりに花をそえるのである。

## おわりに

今回筆者は、サラワク先住民の中でも特にクニャ族の陸稲栽培の播種作業について調査を行い、播種作業がもつ他の栽培作業や村の共同作業とは異なった意味について考察した。そこから、クニャ族が現在まで続けてきた播種に祭祀的な要素があり、人々がそれを単なる農作業とはとらえず積極的に楽しんで行っていたことがわかった。しかし今回の調査は1カ月あまりという短い期間であり、彼らが行う陸稲栽培の全過程のうち焼畑、播種しかみることができなかった。そのため本論において陸稲栽培の他の過程や、陸稲栽培以外の共同作業のあり方の分析は行っていない。今後の展望としては、そういった陸稲栽培の他の過程についての調査を行うと共に、東南アジアの他地域においてもみられる陸稲栽培の播種儀礼の意義との比較研究などを行っていきたく考えている。そこから、クニャ族の歴史的・文化的な背景から現在の価値観や作業の意味を探ることも可能となる。森林伐採がもたらす生活環境の変化や都市部への人口流出により、今まで継承されてきた文化はその意味が軽んじられあり方を変えつつある。その中から、変わっていく価値観と変わらない価値観について継続して調べていきたいと考える。

## 謝辞

最後に、この場を借りてこの調査、論文作成を行うにあたりお世話になった方々へのお礼を。村へ行くきっかけを作ってくださったサラワク大学のA教授や快く同行を許可してくださったSave RiversのMr.Peterには、論文の完成とともに感謝を伝えたいと思います。そして言葉もわからず村に滞在し、ヌガン作業中は禁忌を犯してしまうといった失態を犯すような筆者を見捨てず生活に加えてくれた村の人々、村

では様々な話を聞かせてくれ、忙しい中仕事の合間をぬって日本に遊びに来てくれた Upit には感謝の気持ちでいっぱいです。クニャ語が通じない筆者を持って余しているのが目に見えてわかった村長夫妻には、申し訳ない気持ちもありながらも、話をして笑ってもらえることが大変嬉しかったです。Upit は、せっかくの日本滞在にも関わらず論文作成のためになかなか山などの自然を案内することができませんでした。次の機会には夏の海を案内したいと思います。

そして論文作成では、指導教員である竹川大介先生をはじめとしたゼミ、九州フィールドワーク研究会のみなさんには、忙しい中度重なる検討や校正で毎日深夜までお付き合いいただき、論文資料のいくつかも作成していただきました。暖かい研究室やおいしいご飯なども筆者の活力につながりました。そのおかげもあり、最後まで妥協することなくいい論文に仕上げられたと思います。数々のサポート、本当にどうもありがとうございました。

## 註

### 1. サラワク州のダム建設問題

今回はサラワク州のダム建設反対運動を行う地域団体Save Riversに同行しバラム川をさかのぼった。彼らは、定期的に地域住民が作成したダム建設を阻むバリケードを訪問したり、ダム建設により影響を受けるサラワク奥地の村を訪れ、ダムによる暮らし、生態系への影響を説明している。

サラワクのダム開発問題は、サラワク州政府と株式会社サラワクエナジーがサラワク州の発展を目指し行うSCORE(Sarawak Corridor of Renewable Energy)に基づき発生している。SCOREは、2030年までにサラワク州が州の資源利用において、アルミニウムなどを始めとした10の貴重な資源により開発計画が支えられ、サラワクの中小企業による雇用を増やすことを目標としている[SCORE(Sarawak Corridor of Renewable Energy) HP]。その計画の一つとして、SCOREはサラワクにおける50以上の新たなダム建設を唱えており、既にバタン・アイ(Batang Ai)やバクン(Bakun)などには、メガ・ダムと呼ばれる巨大ダムが作られ、それに伴い先住民族の移住・土地問題が生じている。バラム(Baram)地域でも建設が始まろうとしていたが、地元住民の強い反対に合い建設作業は2013年10月23日から中断している。

### 2. ロングボート

ロングボートとは、4メートルから6メートル程の木で作られたボートである。現在ロング・モウ村ではその大半がエンジンを搭載しているが、手漕ぎで使用している家庭もある。

### 3. 公用語

2015年11月18日にサラワク州知事は、マレーシアの公用語であるマレー語に加え英語でも公式文書を書く事を許可すると発表した。

### 4. マレーシア連邦

1963年のマレーシア連邦成立時には連邦に属していたシンガポールは65年にマレーシアから分離独立した。

### 5. 首狩りの習俗

首狩りとは、人身供養や食人などと並んで伝統的な共同体にみられる(あるいはみられた)儀礼的殺人の一種である。共同体の外部の人間の首級をとってきて保存する呪術・宗教的またある意味では社会的な慣行である[山下 1994:225-226]。

### 6. ルアイ(Ruai)

ルアイとは幅4メートルくらいの廊下状の部分であり、ロングハウスの全住民の共用の通路となっている[木村 1989:63]。住民はここで手作業を行うこともあれば作業のない時間帯にここで涼んだり他の住民と話をしていることもある。

### 7. 綱引きに性的儀礼が含まれている

スポーツ民俗学を研究する寒川は、綱引きの性的豊穡儀礼としての性格は、綱を引くのに男女が対抗したり、あるいは雄綱・雌綱とよぶ二本の綱を一本に結び合わせて引き綱とするなど、両性の参加が不可欠であることを前提とする状況から抽出されたものであると述べる[寒川 1986:97]。

## 参考・引用文献一覧

- 池端雪浦、生田滋著、1977『東南アジア現代史Ⅱ フィリピン・マレーシア・シンガポール』山川出版社
- 岩永友宏、2000『先住民族ブナン ボルネオ最期の狩人たち』批評社
- 内堀基光、1994「イバン」「ダヤク」「長大家屋」「陸ダヤク」『文化人類学事典』石川栄吉・梅棹忠夫・大林太良・蒲生正男・佐々木高明・祖父江孝男(編)63頁、461頁、483頁、815頁、弘文堂
- 内堀基光、1996『森の食べ方—熱帯雨林の世界(5)』東京大学出版会
- 大木昌、2006『稲作の社会史 19世紀ジャワ農民の稲作と生活史』勉誠出版
- 荻原秀三郎・渡辺良正、1986「陸稲の祭り」『田園祝祭 さと』大林太良・宮田登・荻原秀三郎(編)、pp14、旺文社
- 寒川恒雄、1986「綱引き 豊穡儀礼の世界」『田園祝祭 さと』大林太良・宮田登・荻原秀三郎(編)、98頁、旺文社
- 木村陸男、1989「イバン族のロングハウス」『「すまい」と「くらし」 第三世界の住居問題』堀井健三・大岩川嫩編、63頁、アジア経済研究所
- 口羽益生、1982「宗教と世界観」『もっと知りたいマレーシア 第2版』綾部恒雄・石井米雄(編)156頁、弘文堂
- 関本照夫、1986「稲作民の神話的風景」『田園祝祭 さと』大林太良・宮田登・荻原秀三郎(編)pp98頁、旺文社
- 中原道子、1982「歴史的背景」『もっと知りたいマレーシア 第2版』綾部恒雄・石井米雄(編)1-33頁、弘文堂
- Zainal Abidin bin Abdul Wahid, 1980 Glimpses of Malaysian history Dewan Bahasa dan Pustaka  
(『マレーシアの歴史』野村亨訳:山川出版 1983年8月)
- Dove, Michael R, 1985 The Agroecological Mythology of the Javanese and the Political Economy of Indonesia. Indonesia 39:1-36.  
Southeast Asia Program Publications at Cornell University
- Chong, Pek Lin, 1998 Folk Songs of Sarawak— Songs from the Kenyah Community. Dayak Cultural Foundation
- Hatch, T, 1980 Shifting Cultivation in Sarawak: Past, Present and Future in J.I. Furtado (ed.), Tropical Ecology&Development.  
Proceedings of the Vth International Symposium of Tropical Ecology pp483-96
- Hong Evelyn, 1950 Natives of Sarawak. Institut Masyarakat  
(『サラワクの先住民 消えゆく森に生きる』北井一・原後雄太訳:法政大学出版局 1989年7月)
- Spencer John E. 1966 Shifting Cultivation in Southeastern Asia. University of California Press
- Victor T. King, 1978 Essays on Borneo societies. University of Hull by the Oxford University Press
- 平戸幹夫、1982「風土と地理」『もっと知りたいマレーシア 第2版』綾部恒雄・石井米雄(編)49頁、弘文堂
- 山下晋司、1994「首狩り」『文化人類学事典』石川栄吉・梅棹忠夫・大林太良・蒲生正男・佐々木高明・祖父江孝男(編)225-226頁
- マレーシア統計局公式サイト Department of Statistics, Malaysia Official Portal  
<https://www.statistics.gov.my/index.php#> (アクセス日時:2015.12.7 20:14)
- マレーシア観光局公式サイト Tourism Malaysia  
<http://www.tourism.gov.my/en/about-malaysia/culture-n-heritage/people>
- マレーシア灌漑局公式サイト Department Irrigation and Drainage Malaysia  
<http://infobanjir2.water.gov.my/map.html>
- [http://forum.mygeoportal.gov.my/smanre/sungai/lembangan\\_sungai\\_utama\\_kategori\\_satu.php](http://forum.mygeoportal.gov.my/smanre/sungai/lembangan_sungai_utama_kategori_satu.php)
- サラワク州政府公式サイト Official Website of the Sarawak Government  
<http://www.sarawak.gov.my/web/home/index>
- History.To.The.MAX

<https://historytothemax.wordpress.com/category/sarawak/>

My Paradise Malaysia

<http://www.mymalaysiaparadise.com/sarawak>

Sarawak Tourism Federation

<http://www.stf.org.my/sarawak/index.php?do=people>

Sarawak Facts and Figures 2010

<http://www.spu.sarawak.gov.my/downloads/Facts%20&%20Figures/Sarawak%202010%20Facts%20&%20Figures.pdf>

Sarikei Time Capsule

[http://sarikei-time-capsule.blogspot.jp/2006\\_03\\_01\\_archive.html](http://sarikei-time-capsule.blogspot.jp/2006_03_01_archive.html)

## 資料1 ロング・モウ村の世帯別の成員(一部)

以下にロング・モウ村の村人について、住居と世帯別にその成員を示す。数字は住居の区別を示している。住居と示されている場合はロングハウスではなく一戸建てを示す。夫婦または親子は同一アルファベットで示され、アルファベットの大きい文字が男性を指し小さい文字が女性を指す。また、子供は父親のアルファベットに続けてアルファベットの大小で性別を示す。必要であれば数字により兄弟順を示す。数字の若い方が年上である。罫線によって世帯を示し、罫線内に含まれる成員は同じ部屋(ビリック: Bilik)に住むことを示す。

---

### ロングハウス1

#### 村長Aとその妻a

50代中頃の夫婦。7人いる子供のうち6人は街へ移住しており、長女Aaのみ村に住んでいる。AaはWと結婚し一戸建ての住居7に住んでいる。Aは後述の住居5に住むPの実弟である。aは7人兄弟の長女で、兄弟のうちaと後に出てくるFの2人のみが村に住んでいる。筆者はA夫妻の家に滞在していた。A、a共に英語は喋れず、寡黙なAが必要最低限のコミュニケーションをマレー語で行い、aは常にクニャ語のみ話していた。村に来客があると、Aの家でもてなされ滞在することがほとんどである。

#### B、Bの父とBの兄

BはAの隣人の43歳男性。Bの兄は知的障害を持っている。英語を少し話すことができ、筆者が村で一番初めに話をした人物である。AとBの部屋の境目となる水場の壁は隙間が多く、A、aがそこで作業をしていると顔をのぞかせ会話をしている。楽器を作る才能に長けており、木製の鍵盤楽器やサンペ(Sampe')とよばれるギターのような弦楽器を作ることができる。

#### Cとその妻c

50代～60代の夫婦。Cはリナウ氏族で村長の妻aの母方の従兄弟にあたる。普段夫妻は焼畑農業のために集落から離れた出作り小屋に住んでいるが、ヌガン(播種)の期間中は数回集落に戻っていた。

---

### ロングハウス2

#### dとその息子達

dは40代後半～50代前半の未亡人であり、2人の息子と暮らしている。dはロング・モウ村に一番近いロング・スラアン出身で貴族階級の出身である。サラワクがイギリスの植民地になる前までオラン・ウルの間では貴族、平民、奴隷と社会身分が分かっていた[ホン1989:16]。実質的な権力関係が発生するわけではないが、村人たちはどの氏族がどの階級に属しているか知っている。dの家族は現在陸稲栽培を行っていないが、焼き畑農業は行っている可能性がある。普段村の中で姿を見ることは多くなく、息子がバイクの修理をしているのを何度か目にした程度である。

#### Eとその妻e

40～50代の夫婦。Eはaと親戚関係にあり、aの母方の叔母の孫がEである。E夫妻には数人子供がおり、そのうち息子1人が村で夫妻と共に暮らしている。Eの妻とロングハウス3に住むKは兄妹である。Eの祖父がかつて名高い首狩り人であり、前村長であった。教会管理を行う4人のうちの1人である。現村長から村長の座を奪おうと画策し、一時期村を二分させていたが自身の行動により周囲の信頼を失い、結果Eは孤立状態になりつつあり村人は現在の村長を支持している。

#### Fとその妻f

45～50歳の夫婦である。Fはaの実弟で7人兄弟の3番目である。村長であるAの家と発電機を共有しており、主電源の管理をしているのがFである。現在妻fと、孫2人の4人で暮らしている。孫の世話があるため最近積極的に狩りに出られないという。バイクを1台所有している。

#### Gとその妻g

30 代後半～40 歳代の夫婦。娘が 2 人いるが長女は学校で寄宿生活をしており、集落では夫婦と子供 1 人の 3 人で生活している。夫はロング・スラワン(Long.Selawan)という別の村の出身である。家族が現在住んでいる部屋は、もともとロングハウス 3 に住む K が所有していた。

---

#### Hとその妻h

50 歳代の夫婦で、妻 h の生家に住んでいる。H は 53 歳でロングハウス 6 に住む T 兄弟の長男である。H の生家は T 兄弟が住む家である。英語をわずかながら話すことができ、英語とマレー語を交えて筆者とよく話をした。H は F の家をよく訪れ話をしていた。

---

#### Iとその妻i

ロングハウス 2 の左端に住む 60～70 歳代の夫婦である。ヌガンの参加は妻 i が積極的で、1 人で参加することが多かった。i は耳が悪く、他の住民と進んで会話をすることはあまりない。

---

#### ロングハウス 3

---

#### J

村長の妻 a と F の末弟で 40 歳の男性である。普段は出稼ぎで村にはおらず、2 ヶ月ごとに村に帰り生家に 1 人で滞在する。村での滞在は長くても 2 ヶ月である。J は自分の収入で a、F の家族に発電機や生活用品を買っており、それがこの 2 家族の生活を大きく支えている。また J は車を所持しており、J が村に滞在している間は村の車が 3 台になる。彼は家族を頻繁に畑に送るため、他の村人からも依頼を受け村人の輸送をすることが多い。英語を話すことができ社会的であり、本論の聞き取りの多くが彼の通訳によるものである。

---

#### Kとその妻k

K はロングハウス 2 に住む e の兄である。k は、ロング・モウからロングボートで 45 分ほどかかる上流の村ロング・スマヤンの出身である。調査期間中 K は毎日ボートを作っていた。また頻繁に川沿いの畑に出向いていた。

---

#### ロングハウス 4

---

#### Lとその妻l

L は a の母方の従兄弟である。l と a は親友であり家族ぐるみで漁に行く仲の良きである。夫妻は 5 年前に集落から離れたところに出作り小屋を建てそこに住んでいるが、集落にも頻繁に帰ってきて滞在する。L は教会管理者のひとりである。街で働いている息子が車を持っており、調査期間中に 2 度村に帰っていた。

---

#### 老人 M とその娘 Mm、Mm の子供 3 人

M はインドネシア出身の男性であり、ロング・モウの女性と結婚して村で住み始めた。妻は既に他界している。3 人の子供を持つ娘 Mm と 5 人で暮らしている。M は教会管理者である。Mm は 30 代で、U と結婚したが現在は別居状態にある。

---

#### Nとその妻n、息子 NN

40 代後半から 50 代の夫婦である。普段村に居るのは夫婦と 22 歳の息子の 3 人である。息子 NN は知的障害を持っており、いじめを恐れた母親 n が小学校後は学校に通わず村で暮らさせている。n は噂好きな女性であり、また a の母方の従姉妹にあたる。N は AD と兄弟である。

---

#### Oとその妻o、oの父

O と o は共に 40～50 代の夫婦である。o は a の叔母の孫にあたる。夫婦は o の実父と共に 3 人で暮らしている。

---

#### 住居 5

---

#### Pとその妻p

P は村長 A の実兄にあたる 60 代男性である。1 戸建ての住居に 2 人の娘 q、r の家族と孫娘 s の家族と暮らしている。また小学校で食事を作っている女性がひとり同居しているが、彼女は村の出身ではない。

#### Qとその妻q (Pp1)

qは40歳でPの娘でありrの姉である。20歳の時未婚のまま娘sを生んだが、娘sの父親とは別の男性と結婚して子供をもうけた。娘sはインドネシア人の男性と結婚してsの娘と共にPの家に同居している。

#### Rとその妻r (Pp2)

妻rはPの娘でありqの妹である。離婚経験があるが現在は再婚し、夫Rは村で唯一の小さな商店を経営している。商売があるためRはヌガンに参加しない。rははつらつとした女性で、播種作業で見られるンガノという儀礼や踊りに積極的である。

#### Sとその妻s (Pp2p)

Sは30代のインドネシア人でqの娘sと結婚し子供が2人いる。4世代で同じ住居に住んでいるが、出作り小屋にもよく滞在して作業をしている。sは現在22歳である。

---

#### ロングハウス6

##### 兄弟T1、T2とその従姉妹

T1が40歳、T2は31歳の兄弟であり、従姉妹の女性と3人で暮らしている。またHは2人の実兄であり、9人兄弟でHが長男、T1が6番目、T2が9番目である。T1は村に2台しかない常駐の車の1台を、T2はバイクを1台所有している。

#### U

Iの弟でありabの兄弟でもある30代の男性。Mの娘Mmと結婚しているが現在は別居しており、自身の生家に1人で暮らしている。普段Uの子供はMmと生活をしているが、Uの家にも自由に出入りする。UがMmと親しくする様子は全くみられなかった。

#### Vとその妻v

20代後半～30代の若い夫婦。1歳の子供がいる。また妻はプナン人である。2人とも静かでおとなしく、他の村人と関わる様子はあまりみられなかった。

---

#### 住居7

##### Wとその妻w

Wはaの父方の従兄弟である。5人の子供がおり、車を所有している。現在住む住居7は、aの母親が所有していた家である。また、wはaの長女である。Wは30代後半から40代前半、wは30代前半とみられる。

---

#### ロングハウス8

##### Xとその妻x

Xは学校のセキュリティの仕事をする30代後半の男性である。村で仕事を持っているためかX自身ではなく妻のxが積極的にヌガンに行く様子がみられた。また多忙を理由に焼畑をプナン人に依頼した。

##### Yとその妻y

Yは70歳の男性で英語を話すことができる。村に移住したのは定年後で、それまでは街で仕事をしていた。頻繁に出作り小屋に滞在している。

---

#### 住居9

##### Zとその妻z

Lの妻Iの妹夫婦である。夫Zは学校で教師をしているため、学校の敷地内にある教員用の住居に妻の実母と息子ZZ家族の4世代で暮らしている。Zはヌガンにほとんど参加しておらず、Lの畑などzにとって血縁関係のある畑のヌガンにzとZZが参加する様子がみられた。

#### ZZとその妻zz

ZZは教師Zと妻zの息子で、zzはイバン人女性である。娘が1人いる30代男性。ヌガンにはLの畑やリーダーの畑など、数回のみ参加していた。母zをバイクで畑に輸送する姿をよく見かけた。また狩りには積極的であり、叔母にあたるIの出作り小屋周辺で狩りを行うこともあった。妻zzは学校で事務員として働いている。

---

#### 住居 10

---

##### ab

1人で暮らす60代の未亡人である。村の住民は積極的に彼女に話しかけず、また彼女が1人でやっている作業を手伝おうとしない。例えば男性にとっても重いボートのエンジンを彼女が運んでいても、その手助けをしないなどである。村人は彼女を疎んじると同時に恐れている様子であった。村人の大多数が犬を飼っているが、abは室内で子猫を飼っていた。英語は話せないが、ある日筆者を家に招き入れお茶などを振舞った。

---

#### その他の居住地

---

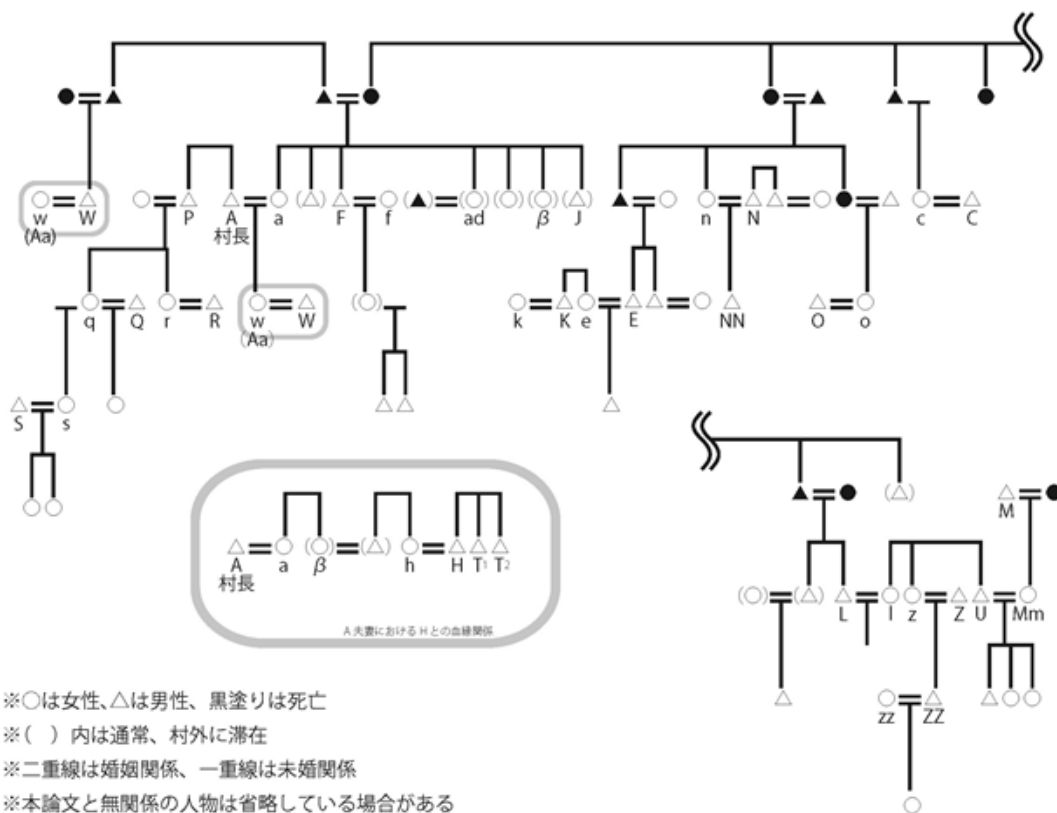
##### ACとその妻ac

集落から一番離れた、隣村との境に近い家に住んでいる50代とみられる夫婦である。出作り小屋にそのまま移住したものと思われる。夫ACはロングハウス4に住むNの兄弟である。

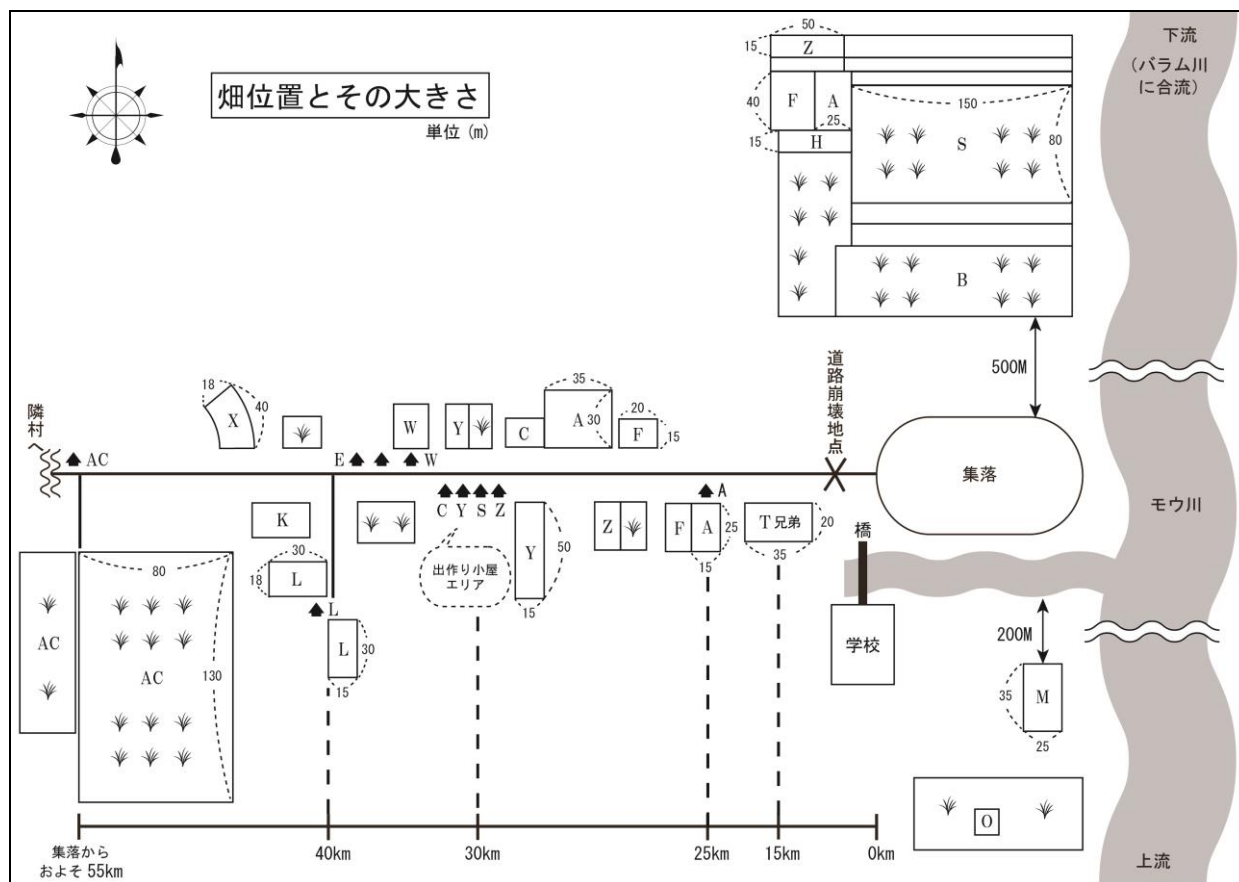
##### ad

aとF、Jのきょうだいであり7人きょうだい中4番目にあたる女性。普段は街に住んでいるが時々村に戻る。今回は街に下りた弟Jの車で村に帰省し、約2週間村に滞在しヌガンにも毎日参加していた。I、fと同級生で、播種作業で3人が揃うと必ずンガノが盛大に行われた。

資料2 ロング・モウ村家系図(一部)



資料3 畑の位置と大きさ



資料4 日付別ヌガンの特徴

※日曜日は礼拝のためにヌガンは行われぬ。

※8月14、15日は筆者が集落を離れたためヌガンの実施状況は不明である。

日付	畑	参加人数	特徴	畑位置
2015/7/28(火)	S	45	リーダーの畑	川
7/29(水)	T兄弟	28		道路
7/30(木)	A	18	村長の畑	川
7/31(金)	F	20		川
8/1(土)	H	19	川の氾濫	川
8/2(日)				
8/3(月)	L		ヌガン中止	
8/4(火)	復旧工事	10		
8/5(水)	P		筆者不参加	川
8/6(木)	Y			川
8/7(金)	A	22	A(2か所目)	道路
8/8(土)	O		筆者不参加	川
8/9(日)			牧師来村	
8/10(月)	C、L	22	重複	道路
8/11(火)	なし			
8/12(水)	H、Y	16	重複、H、Y(各2か所目)	川、道路
8/13(木)	清掃作業			
8/14(金)	不明			
8/15(土)				
8/16(日)				
8/17(月)	M	19		川
8/18(火)	X	21	ブナン人による焼畑	道路
8/19(水)	AD	20	巨大な畑	道路
8/20(木)	なし			
8/21(金)	なし			
8/22(土)	L	15	L(2か所め)	道路

資料5 ヌガン参加状況

住居	ヌガン先 参加者	1題目					2題目					3題目			4題目				
		7.28Tue	7.29Wed	7.30.Thu	7.31Fri	8.1Sat	8.3.Mon	8.5Wed	8.8Thu	8.7Fri	8.9Sat	8.10Mon	8.12Tue	8.17Mon	8.18Tue	8.19Wed	8.22Fri		
		S	T兄弟	A	F	H	L	P	Y	A	O	L	Y	M	X	AC	L		
ロングハウス1	A, a	OO	OO	OO	OO	OO						OO	(X△)	(H△)					
	B	O	x	x	x	x						x	x	x	x	x	x		
	O, o	OO	OO	xx	xx						OO		△△	Ox	xx	OO	OO	OO	
ロングハウス2	d																		
	E, e	OO	xx	xx	OO	xx				xx		xx	xx	xx	O?	xx	xx		
	F, f	Ox	xx	Ox	OO	Ox				OO		Ox	△	O	Ox	Ox	?		
	G, g	?	x	x	O	O				x		x	x	?	O	x	x		
	H, h	OO	OO	OO	OO	OO				OO		△	△△	OO	OO	OO	xx		
ロングハウス3	I, i	OO	OO	xx	xx	?O				?		xx	xO	x	xx	OO	xx		
	J	O	O	O	O	O				O		O	O	O	O	O	O		
	K, k	OO	xx	xx	xx	xx				xx		xx	xx	xx	OO	OO	xx		
ロングハウス4	L, l	xx	xx	OO	OO	xx				OO		OO	OO	xx	xx	xx	OO		
	M	O	O	O	x	O				O		O	x	O	x	x	x		
	Mm	x	x	x	x	x				x		x	x	O	x	x	x		
	N, n	OO	xx	xx	xx	xx				OO		OO	OO	OO	xx	OO	xx		
	NN	x	x	x	x	x				x		x	x	O	x	O	x		
住居5	O, o	OO	xx	xx	xx	xx				OO		OO	OO	OO	xx	xx	xx		
	P, p	O	x	O	x?	?				O		O	x		O	x	x		
	Q, q(Pp1)	OO	OO	x	x	xO				xx		??	Ox	?O	?	xx	xx		
	R, r(Pp2)	O	O	O	x	x				x		O	O	O	O	x	x		
ロングハウス6	S, s(qq)	OO	Ox	xx	xx	xx				OO		△	?		xx	xx	OO		
	T1	O	O	O	O	O				x		x	x	O	O	x	x		
	T2	O	O	O	x	O				持り		x	x	O	x	x	x		
	U	O	O	x	x	x				x		x	x	O	x	x	x		
住居7	V, v	Ox	xx	xx		xx				xx		xx	xx	xx	OO	xx	xx		
	W, w	OO	OO	OO	xO	OO				OO		OO	OO	xx	xx	xx	OO		
ロングハウス8	X, x	OO	?O	xx	OO	OO				xx		xO	xx	xO	OO	OO	xx		
	Y, y	OO	xx	OO	O	OO				?		OO	OO	xx	xx	xx	OO		
住居9	Z, z	xO	xx	xx	xO	x				x		xO	xx	xx	xx	xx	xO		
	ZZ, zz	Ox	xx	xx	Ox	xx				xx		Ox	xx	xx	xx	xx	xx		
住居10	ab	O	x	x	x	x				x		x	x	x	x	x	x		
その他	AC, ac	?	xx	xx	xx	xx				xx		xx	xx		OO	OO	xx		
その他	ed	O	O	O	O	O				O									
参加者人数		45	28	18	20	19				不明	不明	22	不明	22	16	19	21	20	15

※○:参加 ×:不参加 ?:不明 △:他方の畑へ参加

※筆者が参加したヌガン先での参加状況のみ記している。

※8月3、5、6、8日はヌガンに参加できなかったため村人の参加状況は不明である。

※8月10、12日にみられる△は、重複したヌガンのうち筆者が参加していない畑への参加を意味する。

## 資料6 具体的なヌガンの事例内容

※面積を示す際の縦は斜面に対し平行な長さを示し、横は斜面に垂直な長さを示す。

※畑の所有者の横の人数はおおよその参加人数を示す。筆者は参加人数に含めない。

---

7月28日 金曜日 Sの畑 45人

---

- ・ヌガン開始の日であり、ロング・モウ村全体でヌガンが開始された。
- ・今年のヌガンリーダーは住居5に住むSであり、彼の畑に行った。しかし畑の所有者について尋ねた際、「Pの畑だ」という答えもあった。
- ・畑は川沿いにあり、広さは推定縦150メートル、横80メートルである。
- ・Sの畑は推定縦100メートル、横400メートルほど開墾された丘陵地にあり、そこにはSの畑以外の村人の畑がいくつかあった。
- ・ヌガンが行われていない土地を挟んだ先に、同じようにヌガンをしている人々がいた。村人に誰かと尋ねると「同じロング・モウの人間だ」と答えた。
- ・同じロング・モウの人間なのにどうして分かれて行っているのか村人に聞いたところ、言い方に迷いながら「彼らは違うグループの人たちだから」と答えた。
- ・当日は小雨が降っていたが人々は畑へ移動し、食事をしながら雨が止むのを待っていた。しばらくして雨は止みヌガンは快晴のもと行われたが、雨の影響で地面はぬかるみ、より滑りやすくなっていた。しかし村人にそれを気にする様子はなかった。
- ・集落や農作業用の小屋付近で見たことがある人もいれば、今までまったく見なかった人もいた。
- ・畑に到着したとき小屋の中では火が焚かれ、料理が準備されていた。料理はのち参加者全員に配られた。
- ・小屋のそばには小川があり、水がドラム缶に貯められ作業に用いられていた。
- ・作業前に村人はいくつものビンロウジやタバコの準備をしていた。具体的には作業の合間にビンロウジやタバコをすぐ取り出して口にすることができるようにあらかじめ葉に石灰を塗ること、ピナンの実の皮をむき細かく割る作業をすること、タバコの中身を葉巻で包むことなどである。
- ・普段は集落から離れた出づくり小屋で生活している人もヌガンに参加していた。
- ・最後に遅れて畑にやってきたのはE夫妻で、彼らは人が多く集まる小屋の出入り口側ではなく後ろ側の床下に荷物を置き、そこで食事をとっていた。
- ・食事や準備が終わると数人の男性がトゥガンを握り締め畑を上がり始めた。しかし、多くの人々は小屋の外で十字架と穀の入った袋を囲い、祈りをあげていた。Eが代表して祈りを捧げていた。
- ・祈りが終わると、男性は斜面を登り始め、女性たちはそれを小屋のそばで見ながら話をしていた。
- ・朝7時半頃から移動し、9時頃に始まったヌガンは2時間半程度で終了した。人々は休憩してンガノ、シラム(水かけ)を行っていた。
- ・その後集落へ帰る人と残って作業をする人に分かれた。
- ・E夫妻は、村人がンガノで盛り上がっている最中に早々と畑を後にした。
- ・Pの家族とAa、その他数人が畑に残り作業を続けた。

---

7月29日 水曜日 T兄弟の畑 28人

---

- ・初日に引き続き2日目で、多くの人がヌガンに参加した。人数は28人である。
- ・その後見ることがなくなったロングハウス11に住む青年、学校の敷地内に住む男性などがヌガンに参加していた。
- ・畑は道路沿いから山を下り幅2メートルの川を渡った先にある。広さは推定縦20メートル横35メートルほどである。
- ・畑は横に長く、焼け残った大木が目立った。勾配が急で、筆者にとっては最高地点から坂を下るのが困難であった。
- ・初日はどこかぎこちなく行われたンガノ・水かけであったが、この日は水かけが盛大に行われた。
- ・T兄弟の家に同居する従姉妹が参加していたが、彼女の参加は前日のヌガンリーダーの畑とT

兄弟の畑のみであった。

・この畑はT1、T2 どちらかの畑とは呼ばれず、常に「T1 とT2 の畑」と呼ばれていた。

---

7月30日 木曜日 村長Aの畑 18人

- ・村長の畑であるにも関わらず参加者は少なく、18人のみであった。
- ・川の先にある畑で、山を少し登った先にある。周りも広く開墾されており、山や谷になっている場所に木が置かれ畑が区切られている。
- ・畑の広さは縦25メートル、横40メートルほどであった。
- ・他の畑の作業小屋に比べ、Aの小屋は簡易的で木を組んだだけであった。ビニールシートのようなものを被せて屋根としていた。
- ・ヌガンが開始された後この日初めて昼食までに作業が全て終わらなかった。しかし昼食後30分程ですぐに作業は終了した。
- ・ヌガン(穴あけ)に参加したが、村人(特に男性)に何度かやめるようにと言われた。作業は簡単そうに見えたが、実際には穴をあける間隔の目安や個数などの決まりがあった。
- ・あとで聞いたところによると、この日筆者が男性の仕事であるヌガンを行ったのに対し村人は大きな反感を抱いていたという。

---

7月31日 金曜日 Fの畑 20人

- ・7月30日に行った村長Aの畑の上部がFの畑であった。
- ・前日より人が少し増えていた。畑の広さは推定縦30メートル横40メートルである。
- ・シガノ、水かけが盛大に行われ、fに連れてこられていたF夫妻の2歳と4歳の孫は、人々が行うシガノの激しさに恐怖を感じ泣いていた。

---

8月1日 土曜日 Hの畑 19人

- ・全日夜にHの家に行くと、H夫妻に加えHの弟であるT1とT2が家畜の鶏をさばっていた。それはもてなしのための食事の手伝いであった。
- ・当日朝は夜から降り続いた大雨の影響で川が氾濫していた。人々はヌガンの準備をしてHのロングハウスに集まり様子をうかがっていた。朝10時頃水が大方引いたのを見て人々は移動をはじめた。
- ・畑は川沿いの開墾地にあり、縦に長く斜面が急だった。上部には焼け残った大木が何本か見られた。広さは縦50メートル横15メートルほどである。
- ・A、Fの畑と丘陵をはさんだ裏側に畑があった。
- ・ロングハウス2に住むGがヌガンではなく女性と共に播種に参加していた。Gは穴あけを行わず播種作業のみを行った。
- ・筆者はGの後を追って播種作業に参加したが、足並みが遅れる度に小屋に戻るよう言われた。
- ・シガノ、水かけが行われたが、T1がシガノから逃げようといち早く畑から去りボートへ向かったため、人々は早めに畑から去った。

---

8月3日 月曜日

- ・Lの畑の予定だったが8月1日の大雨の際の道路崩壊のためヌガンは中止された。
- ・しかしL夫妻はヌガンのために8月1日に崩壊した道路を渡り、9時間かけて出作り小屋まで帰りヌガンを行っていた。

---

8月4日 火曜日 道路補修作業

- ・A、H、J、L、S、T兄弟、W、V、ZZ、学校で働く男性の計10人が道路の補修作業を行い、筆者も観察を行った。
- ・参加者は一日かけて作業を行った。その際、彼らは村の道路管理を担当する役職にあるEがこの事態に対し無反応であることにつ

いて批判をしていた。

・夕方、作業が終わりに近づいたころEがバイクで通りかかった。彼は村人と少し会話をした後道路を渡り自分の畑へ向かった。道路管理の責任者でありながら今回何も行動を起こさなかったEが一番に道路を悠々と使用したことに対し、人々は大変憤慨していた。

---

8月6日 木曜日 Yの畑 人数不明

---

- ・川沿いにある畑で、AやF、Hと同じ開墾地であった。
- ・畑の広さは推定縦 50 メートル横 15 メートルほどであった。
- ・他の畑では作業終了後に飲まれることが多かったブラッをYは飲み水代わりにするかのように作業中から積極的に人々に飲ませていた。Yのブラッは大量の水で薄められており酸味が強く、人々はそれを味わうというより目をつむり流し込むようにして飲んでいた。
- ・同日、少し離れた畑でグループ 2 に属する村人らがヌガンを行っていた。作業終了後にグループ 1 の村人がグループ 2 の参加者にンガノをしにいく姿が見られ、両グループの人々は共にンガノを楽しんでいた。

---

8月7日 金曜日 Aの畑 22人

---

- ・Aの2つ目の畑であり、道路の真横にあった。畑の広さは縦 40 メートル横 70 メートルほどであった。
- ・隣はCの畑で、通常この畑の近くの出作り小屋に滞在しているCが自身の畑と同時にAの畑の焼き畑も行った。
- ・Aの畑の初回のヌガン(18人)に比べると多く、22人の参加者がいた。
- ・ヌガン、水かけが楽しめるというよりは手短に行われた。少し形式的であったように感じた。
- ・筆者は、犬が食事に手をつけないう見張りを頼まれ、ヌガンの参加は勧められなかった。

---

8月10日 月曜日 Lの畑(Cの畑) 22人

---

- ・数ヶ月に一度の牧師訪問の翌日であったため、牧師達3人も畑に同行した。
- ・この日Cもヌガンを行った。そのため集落から共に移動してきたHやS夫妻など数人はLではなくCの畑のヌガンに参加した。
- ・畑の広さは縦 18 メートル、横 30 メートルほどで、勾配がなく狭かったため作業はさほど困難ではなかった。
- ・畑には大ミツバチが多くおり、人々を煩わせた。人が多かったせいか多くのハチが集まり、1人あたり20匹前後、多い人には30匹ほどのハチが体にまとわりついていて、人々は、香りのある木の皮を燃やしハチを遠ざけた。
- ・作業が終わると、出作り小屋の中で激しい水かけが行われた。また小屋から集落へ帰る途中、出作り小屋が複数立ち並んだ箇所に差し掛かると、人々は車から降り盛大にンガノ・水かけを始めた。

---

8月11日 火曜日 Yの畑(Hの畑) 16人

---

- ・Yの畑は道路沿いであり、8月7日に行われたAの畑と道路を挟んだ反対側にあった。
- ・Yの畑に移動する際、川へ向かう人と車へ向かう人に分かれており、同日Hもヌガンを行うことがわかった。しかし、村人が朝迷うことなく移動を行っていたため、彼らはヌガンの順番と2人の畑のヌガンが重なることを知っていたと考えられる。
- ・ヌガン日が重複した結果、Yの畑に集まった人数は16人と普段以下であったがYは「悪くない人数だ」と言った。
- ・またYは「この畑はそんなに大きくないからすぐ終わる」と発言したが、当日は暑さが厳しかった上に人数がいつもより少なく、勾配も急であったため人々はいつもより疲れているようであった。畑の広さは推定縦 50 メートル横 15 メートルである。
- ・畑が道路から谷に向けて作られており、上部から作業を行い最下部で終了したのち、再び斜面に登らないといけなかったことも疲労の原因だと考えられる。
- ・ンガノや水かけがこの頃から見られなくなる。村人の1人は「何度も同じことをして多くの人が飽きている。その日の参加者によって行わないことも多い」と言っていた。積極的にンガノを行う人が集まっていないとンガノは起こりにくいようであった。

---

8月17日 月曜日 Mの畑 19人

---

- ・川沿いにある畑で、縦20メートル、横35メートルくらいの広さで勾配は急ではない。
- ・Mの娘Mmと別居状態にある夫Uが来ていたが、M親子とUの間に会話などは見られなかった。
- ・Uは始め自分の娘と小屋にいたが、しばらくしてからトウガンを持ち畑へあがり最後まで作業に参加した。
- ・Mはこの日トウガンではなく播種作業を行っていた。後にも先にもMが播種作業を行ったのはこの日だけである
- ・普段は見かけない女性dがおり、Mがその女性に話しかけている姿を何度か見た。後にMがこの女性に好意を抱いていると知る。
- ・ンガノ、水かけは行われなかった。

---

8月18日 火曜日 Xの畑 21人

---

- ・Xの畑は集落からかなり離れた道路沿いにあり、前日XがJに車を出して村人を送るように依頼をしていた。
- ・畑の広さは縦18メートル横40メートルほどであった。
- ・出作り小屋などは作られておらず、人々は食事や休息を車の荷台や地面に並べた丸太で行った。
- ・畑の木々がきちんと燃え尽くされておらず、生木が数本見られ地面も露出していなかった。Xが多忙を理由に焼き畑をブナン(Penan)族の人々に依頼していたためであった。ブナン族は焼き畑を行わないため、作業が粗雑であると村人は言っていたが、参加者の中にブナン人のvがいたため批判は大きな声ではされなかった。
- ・普段ヌガンに姿を見せないEが参加し、始めの祈りを捧げていた。
- ・また、初めて見る中年の夫婦ACがいた。彼らは村はずれに住む夫婦で、翌日のヌガンのためにビールの買い出しと村人の送迎をJに依頼した。
- ・籾殻がなくなるのを心配したxが全ての箇所にとウガンをしなくても良いと言ったが、結果籾殻が余り、一度は作業を終えた男性達は再びトウガンをしなければならなかった。
- ・EやK夫婦、若い夫婦など、普段は見かけない人々が数人見られた。Kに参加理由を尋ねたところ、「まだ私はヌガンしてない畑があるからね」と言っていた。つまり、Kはこの畑のヌガンに参加することで、まだヌガンをしていない自分の畑への参加を求めていると考えられる。

---

8月19日 水曜日 AC夫妻の畑 20人

---

- ・これまで他人の畑のヌガンには参加していなかったと見られるAC夫妻の畑であるが、20人の人が集まった。村人の1人が、「今日ここにきている人はまだヌガンをしてない畑がある人だよ」と話していた。
- ・もてなしで用意されていた食事に肉はなく、魚と野菜のみであった。
- ・道路脇にある彼らの家から畑までは遠く、2回ほど峠を越える必要があった。
- ・畑は広大で、丘陵地ではなく川に近い平らな土地が開墾されていた。広さは縦130メートル横80メートルほどである。
- ・朝8時頃から作業を始め4時間程度で小屋に帰り休憩、昼食をとるのが普通であるが畑の所有者であるAC夫婦は昼時になっても何も支度をせず、参加者には休憩も昼食も与えられなかった。作業は夕方4時まで行われた。
- ・男性たちが作業途中に川で水浴びをして休憩しており、「ベテランでもこの広さで休憩、食事なしは相当こたえる」「なぜAC夫妻は休憩を設けたり食事の用意をしないのか」「この広さなら普通2回に分けてヌガンをする。1日でするにしても休憩を入れるのは当然だ」など様々な話がでていた。そこからこの畑のヌガンが村人に「非常識だ」という扱い方をされていたことがわかった。
- ・村人からは「他人に対してこんな仕打ち(休憩、昼食もないまま丸一日働かせたこと、それに対し謝罪もなかったこと、食事に肉がなかったことなど)をするのであれば、もう次は誰もこの畑(のヌガン)には来ないだろうね」という言葉も聞かれた。
- ・AC夫妻は前日、参加者の輸送とビールの買い出しをJに依頼していた。しかしもう村にビールはなく、Jは自分が家族用に買ったビ

ールを2箱持参した。

・車を所有するWはこの日自分の畑の焼き畑を行っておりヌガンには不参加だったが、人々を集落へ送り返す際の輸送を請け負った。

---

8月22日 土曜日 Lの畑 15人

---

・L夫妻は畑のそばにある出作り小屋に滞在しており、この日にヌガンを行うことが集落の人には伝わっていなかった。

・しかしL夫妻は、畑があまり大きくないのでわざわざ集落から人を呼び寄せず、より近くにある出作り小屋に住む人々にヌガンに来るよう依頼していた。

・急斜面だったが畑の広さは縦30メートル横15メートルほどでそこまで広くはなかった。

・人々はンガノや水かけは行わず、作業が終了するとすぐさま車に乗り込んだ。しかし車の所有者であるWがL夫妻と小屋で長話をし、村人を炎天下の中20～30分ほど待たせていた。

その他、8月5日水曜日にはPの畑でヌガンが、8月8日土曜日にはOの畑でヌガンがあったが筆者はそれぞれボートに乗れず不参加であった。また、8月13日は教会周辺の清掃のためヌガンは行われなかった。14、15日は筆者が村を離れていたためヌガンの実態は不明である。また8月20日、21日はヌガンが行われなかった。